

に於て毫も批難する所なく彼等若し其名稱を好まば斯く名くるところに於て充分の權利を有すと雖も然れども是れ決してウエスレーが用ひざりし名稱なり故に監督の按手禮を施せりとしてウエスレーを批難するは是れ氏が毫も興かり知らざる事に就て氏を批難するものなり氏は總理の按手禮を施せしも之を監督と稱するが如きは其決して思念だもせざりし處なり

蘇國メソヂストの狀態

蘇格蘭に於てウエスレーは多少教會の教師等より厚遇を受けしも一般のメソヂスト信徒の彼等より受けし待遇の略ぼ米國のメソヂスト信徒が受けしものと同様なりしと疑ふ可からざる事實なり蘇國には實に英國教會の教師ありしと雖も彼等多くハメソヂスト信徒若し爾后メソヂスト會と全く關係を絶つにあらざれば聖典に與かることを許さずと云て全く之を拒絶せり故に若し米國の爲に傳道者に按手禮を施すの必要ありとすれば蘇國の爲めにも同く其必要あるや明かなり是故にウエスレーの日記に左の記事あるを致せり一千七百八十五年八月一日一予數人の信友と此事を熟議し遂に彼等の意見に従ひ經驗ある三人の傳道者ジョン、ボーンソント

ウエスレー傳  
道者等に按手  
禮を施す

イマス、ハンピー、及びジョセフ、テロールを聖別し之を蘇國の傳道者とあせり又一年の后一千七百八十六年の年會に於て蘇國の爲にはジョシュニア、ケイレ、及びチャールス、アトモールの二人ハ、アンテギニアの爲にはウィリヤム、ウオレナル、又ニユーファウランドの爲にはウィリヤム、ハンメットに按手禮を施し尙ほ一年后に他の五人に之を施せり又一千七百八十八年に於て氏ハ蘇國に在る時ジョン、バルベル及びジョセフ、カウンレの二人氏より按手禮を受け而して次の年會に於て氏は七人ハ之を施せり夫のアレキザンドル、マーサルの一人なりしが彼の執事及び長老の按手禮を受けしのみならず又綜理たるの按手禮とも領せり又ウエスレーは一千七百八十九年のアッシュエンズデール(註)に於てヘンリー、ミール及びトマス、ランキンに按手禮を施せり是れウエスレーが自ら按手禮を施せし人員の總數なりと信ず氏ハ之をなすに凡て私室に於てし敢て公然と之をなさず屢々午前四時に之を行ひしこともありたり是等按手禮を受けたる傳道者中或者ハ蘇國の爲にし或者ハ外國傳道の爲にして英國ハ残りたる

ものは僅にマーサル、ムール、及びランキン等の數人なりしなり彼等は多くは或は凡てなりしならん執事の接手禮を受けたる翌日直よ長老の接手禮を受けたり而してウエスレーは隨時其証明書を付與せりウエスレーが己れキリストの役者として自ら他人に接手禮を施すの權利を有したると尙や監督及び他の教師又ハ長老等と異なる處なかりしは敢て疑ふ可らざるとなりと雖ども氏は毫も英國教會の教師として之を吝すの權利を有せざりしなり故に氏が此事を行ひたるは即ち實際教會より分離したるなり是れ即ちロールド、マンسفヒールドの意見にして又其兄弟チャールスの議論なり然るもウエスレーハ之を承諾せず尙自ら英國教會の一人なりと主張せり

ジョン、アツ  
プルトンの改  
悔及び其働き

是よりウエスレーの勞働の記事お移らんよ 氏ハ一千七百八十四年の年會終るや否や直に傳道旅行の途に就き二日の后シユルースベリーに來り善良あるジョン、アツプルトンの葬式説教をなせりジョンハ柔皮匠なりしが偶然の事よりして遂にメソヂスト信徒となれり彼一日プリストルに

て會堂に往きしに一人の教師メソヂスト教徒に對する惡口説教彼の既に二ヶ所の會堂お於て斯る説教をなせりをなすを聽けり其后幾許もかくして其教師再びセント、ニコラス會堂よて説教せんとし公衆に向て其題を陳べ居りしに俄然咽喉閉塞して講壇の後ろに倒れ壇上より轉び落ちたり人々之を其家よ携へ往きしが遂に死せりアツプルトン之を見て甚く感動しシユルースベリーに歸りて后一棟の家を以て禮拜堂となし自ら説教を始めたり而して一千七百八十一年に於てはメソヂスト教徒の爲めに自費を以て講義所を建築しウエスレー之を捧堂式を行へり實に此善良あるシヨ  
ン、アツプルトンに勝りたる献身的の信者の世に其數多からざる可し彼は柔皮匠として其業の容易ならざりしにも拘へらず毎日曜日の外平日二回の説教をなして而して許多の聽衆常に堂内に充満せり彼は信仰の充分なる勝利を得て遂よ一千七百八十四年五月一日溘然永き眠に就けり

ウエスレーハシユルースベリーよりウエールスを経て八月二十九日プリストルに着し數日の後コーク、ホワットニート、及びヴァーミに接手禮を

施せり彼は九月中其周圍の各地傳道を奔走し十月九日ロンドンに歸り而して九日の后オックスフォードシール諸會の巡回を始め后ノルフォルクに赴き夫より爾餘の時日はロンドンと其周邊の諸郡に於て費せり

一千七百八十五年 八十二歳

ウエスレーは此年の始め五日間をロンドン市中を徘徊して屢々脚目よ到るの溶雪泥土を踏んで二百パウンドの義捐金を募るといふ費し而して其金を以て貧者の爲めに衣服を購求せり氏の親しく實際の需要及び如何にして適當に之を救ひ得べきやを知らんが爲よ自から困窮者の家々を訪へり又メンヂストの諸講義所に於て説教し且つ例の如くロンドンの諸會を會し而して其集金四十八パウンド七シリング中より氏が一期間の俸給十五パウンドを受けたり氏が活動の今尙ほ毫も減少せず實に驚くの外なかりき○氏が先年會に於てプリマウスに遣はせしウヰリヤム・ムールの教育あり且つ勇氣と熱心と富める人なりしや明かにして必ず同役者中に於て首要ある位地を占むに至りしなるべしと雖どもウエスレーが年會の憲

貧者の爲に勞す

ウヰリヤム・ムールの分離

法に於て不公平あるか如く見ゆる者ありしより遂にウエスレーを離れて獨立しプリマウスに於て多少激烈なる拮抗者となれり爰にウエスレー招きに應し其紛擾を辨理せんが爲めに二月二十八日嚴霜を冒して其地より去り六日間滯留して其會を一層強固にし夫より去てプリストルに來り其近傍の諸會を訪ひ且つ説教を著して二週間を費せり

愛國に就す

三月二十一日氏は愛爾蘭に向て出發しリグルブールに到る迄沿道の各地に於て説教せしが其間霜雪を冒し郊外まで教を宣べしとも少ならざりき四月十一日ダブリンに着し居ると一週日として此國の各地巡回を始め會堂及郊外に於て説教せり而して人民は概ね皆歡んで氏を迎へ聽衆常に夥多しとして諸會の一般に活潑なりき斯くして諸所を巡回すると二ヶ月及びしが其間氏が働きの殆んど信す可からざる程なり即ち愛爾蘭全國を遍歴して毎日一回乃至三回の説教を著し只に之をメンヂスト會場に於てせしのみならず又諸會堂、長老教會講義所、製造所、投球場、公會所、公廳、穀倉、牧場、菜園、森林、大道、麻布製造所、墓所、街路等何處にても機會ある毎に之をなせりウ

ウエスレーが労働の量

ウエスレーの日誌は實小詳細なりと雖ども必しも各説教及び訪問せし各會を漏れなく記載し居らざるや明かなり然るに此二ヶ月間小氏が其日誌中に記載したる都邑は五六十より少なからずして説教の數の概して八十に下らざるなり、氏ハコルックに赴く途中凡る三十人の騎者お迎へられてコルックに入り其會を訪ひしが當時會友の數は凡そ四百にして現今の數は比すれバ大に多かりしあり、六月十六日ダブリンより還り同二十八日左の如く記せり「神の攝理より予ハ今八十二の齡を完了せり、嗚呼神の爲し難しとし給ふ事ハ何ぞや、予ハ十一年來嘗て疲勞を覺へしとなし予は屢々聲音の絶へて復語るを得ざる迄説教し体力盡きて復進むを得ざるまで歩行したるをありと雖ども斯る時ハ於てすら尙も毫も疲勞の感覺なく惣身全く安かりとなり、予は敢て之を自然の原因に歸せずして神の聖旨とあすなり、斯て愛爾蘭の年會を終り七月十日英國より向て出帆せしが其去る時左の言をなせり「此國の到る處神の事業ハ過る幾多の年に勝れる進歩を爲せり、又曰く「此處は許多の俊秀なる傳道者ありて其十中の九は甚だ敬虔に且熱心

誕生日

なり英國の傳道者は恐くは彼等に及ばざるべし」と

斯くメソヂスト教派は漸次進歩して既に英、蘇、愛の三國中に確立し米國には既に万を以て數ふるの信徒あり西印度諸島及びニューファウンドランド、ノヴァスコシヤ等の地方も亦幾多の會を設立せり加之該教派の感化ハ間接に他の各地も及んで此時より大に宗教の復興を見るに至れり

ペロネツト及びフレッチェルの死

ウエスレーが其最も重要なる益友ジョールハムの副教長ジンセント、ペロネツト及びマデレーの副教長ジョン、フレッチェルを喪ひしは即ち此年の事にしてペロネツトハ五月九日ウエスレーが尙ほ愛爾蘭に在りし時九十二の齡を以て眠る就きチャールス、ウエスレー之を葬り、過る二十年の間小氏がなまたる如き神との交際の地上よて人間の甚だ稀を爲し得る所なり、ウエスレーの益友中ペロネツトハ最年長の者ありしと雖も其最重要の益友はフレッチェルにてありしなりメソヂスト教派及び其創立者を補翼裨益したる者にしてフレッチェルの右に出づる者は未だ嘗てあらざるあり氏が眠に就きしハ八月十四日ありしが其週の安息日には氏自ら其主管

する會堂に於て祈禱説教をなし且つ主の晩餐を行へり、ウエスレーは其頃英國の西部にありし爲め氏を見るを得ず又會葬するを得ざりしと雖ども其後幾許もなくして氏が紀念に説教を出版せり其題の兄弟チャールズの夫のペロネットの葬式の時撰びし題と同一にして「完き人」を目を注ぎ直き人を見よ其人の終りは平和なり」の聖語なりき氏曰く

「予は三十年の間氏と最も親密なる交際をなせり予の數百英里の旅行中毫も互に挟む處なく朝お晝に夜も氏と談話をなせし其間絶へて一失語を聞きしとなく又一失行を認めしとなし予は八十歳以内にして心志言行共小聖く人の模範となるべき多くの人を知ると雖も内心外行氏が如く敬虔小氏が如く全く身を神に献げたる者他に之を知らざるなり凡ての点に於て批難すべき所なき斯る人物は予之を歐洲に於ても米國に於ても發見するを得ざりき實に予は斯る人物を再び此世に於て發見するを得べきやを疑ふなり」と

ウエスレーは七月十四日ロンドンに着し次の日曜日には朝夕共児童

ウエスレー  
レツチエルを  
辨す

ロンドン年會

の教育に就て説教せり、翌朝五時シタイ、ロード會衆の児童等を會せしが來會する者甚だ多くして講義所に滿つるに至れり實に斯る時刻に於て斯く衆多の児童の集會を見るは前後絶へてなき所あるべし、氏は當年會に於て左の如く記せり「七月二十六日(火曜日)年會を開き傳道者の出席せし者凡う七十人なりき……」此年會は八月三日に終りし、五日の後ウエスレーはコルンウォールに向て出發し九月三日に至りブリストルに還り而して一ヶ月の間其地方に留まり十月三日ロンドンに歸り次日復へルトフォールドシールに向て出發せり一週日の後オックスフォードシールに赴き夫より又一週よしてノルフォルクに赴けり氏記して曰く「十月二十二日予はノルウヰッチに歸り其夜非常の大衆に向て一場の説話をなして而して之に予は此四五十年の間に於て國中汝等の如く變り易く汝等の如く頑硬なる人民を見しとなし」と告げたり然れども我儕の働は全く徒勞に屬せしむあらず此地に於ても全く平和の中お眠に就きし者實に少なからざりしあり且つ神お是等枯骨の殘物に向て「生きよ」と言ひ給ふの能力あるなり」と

ノルフォルクより歸て後のロンドンとノルスマントンとシル及びケン  
トの小旅行に此年の餘日を費せり

一千八百八十六年 八十三歳

ウエスレーの此年の始め二ヶ月をロンドンに費やし而して國會開會の  
節上院に往てジョージ三世の勅語を聞けり氏記して曰く「予は王の勅語を  
聽きて大に感歎せり其一語一句の皆法に適ひ全く自然にして毫も作爲の  
跡を見はさざる實に驚服の外なきあり斯る能辨の王ハ歐洲中他よ之ある  
べきや甚だ疑はし」と氏はシテイルロードに於て著るしき起事に遭遇せり  
即ち氏が説教の際神の能力上より降り氏ハ突然祈禱を始め會衆は一般よ  
聲を放て號泣せり

ウエスレー己の宗教上の感覺に就て左の如く記せり

「一千七百八十六年二月二十四日—予ハ未だ嘗て予の經驗の如きもの  
を聞き又ハ讀みしとあるを記憶せず予は始めより一種特別の道を歩み  
來れり即ち予が進行は一平線路の進行にして時に或ハ上り或ハ下ると

ウエスレーが  
ジョージ三世の  
勅語を聴く

ウエスレーが  
宗教上の經驗

ありしと雖ども其差異は甚だ僅かありしあり、ジャンセンとルッポ伯の神の  
其民を導き給ふ道路に三種の別ありと言へり即ち或者ハ殆んど毎事聖  
書の明文に依り或者ハ其行ふ處皆明白なる道理に依り又或者ハ聖書又  
ハ道理に依るよりも寧ろ特別なる感情に依るとなせり予ハ感情に依て  
導かれたるとは甚だ稀にして多くは道理と聖書とに依り而して感ずる  
よりも悟ると甚だ多し予ハ神を愛するの愛と熱心との感情を一層多く  
有せんとを欲するなり」

二月二十六日ウエスレー風雪を冒して向ふ四ヶ月間亘る旅行の途に  
就き先づニューベリーに着して夥多の嚴肅なる聽衆に説教せり然るに其  
宿所につき氏は其寢室の寒きと恰も屋外に於けるが如く實ハ斯る寒き一  
夜を過せしとい四十年來嘗て之なき所なるを言ひ且つ記して「予ハ翌朝三  
時に至る迄少しも眠ると能はず而して四時に起き出で五時ハ出發せり  
と云へり次の二週日は之をプリストルと其近傍に費やし而して三月五日  
の日曜日には氏が年齢の半ばに足らざる壯年の者すら尙や易しとせざる

旅行

一千七百八十六年

五百七十五

働きをなせり氏曰く「予祈禱を誦し説教をなし而して凡る五百人又聖餐を施せり而して午後三時に再びテンプル會堂に於て説教し同く五時ふにニユールムに於てせり」と、八日の後氏ハ道路の雪を以て掩はれ寒氣の特に嚴烈なりしよも拘はらず蘇格蘭に於て出發し一週間餘ホルミンダムに留まりて其數プリストルの受餐者又劣らざる大衆に聖餐を施し而してマデレーに於てはフレツチャエルの爲に黙示録十四章一節より七節迄を題として追悼の説教をなせり、又レーン、エンドに於てハ日既に暮れ寒氣酷だしく膚に迫りしも自ら予は郊外に於て説教せざる可らざるに至れり而して神我儕の心を暖め給ひたれば我儕の中一人も天氣の何如を念頭に掛けし者なかりしを如しと云ひホルスレムに於ても之と同様の天氣に復た郊外に立つの已むを得ざるを遭遇せり即ち其聽衆の夥多なる之を一屋内に容るゝを得ざりしなり、ポルトンに於ては聽衆中五百五十人の兒童ありしは是等は皆メソヂスト安息日學校の生徒ありき又ランカシャー及び西部ヨルクシャーに於ては到る處聽衆甚だ夥しく爲め屢々屋外に於て説教

蘇國メソヂスト英國教會を脱す

旅行及び勞働

せり、當時氏が名聲は愈々高く迫害は既ち其跡を収め而して夥多の群衆到る處に彼を歡迎せり、五月八日ヨルクを去り始めてイーミングウォールド邑を訪ひ夫より蘇格蘭に進みしが此國に於てはメソヂスト教派は既に全く英國教會より分離したる一教會となり居たり、六月一日氏はアレンウイツクの新講義所の礎石安置式を行ひ次の日曜日ハゲーツヘッドにニューキヤスソルにて夥多の聽衆に向ひ屋外三回の説教をなせり六月五日南方に於て出發し例年の道路を取りて十四日の後ホルに到り同地副牧長の依頼に依り英國中屈指の大會堂に於て無數の聽衆に向ひ二回の説教をなせり次日七十六英里を旅してマルトン、ボックリントン及びスウインフリードに於て説教し而して此日子は充分の働をなせり然れどもその疲勞を感せざるとは尙朝寢牀を離れたる時の如しと云へり翌日クロールとエアウォルスに於て説教し次日又スコットル、ブリッグ及びグリムスビーに於て説教せり、六月二十四、二十五の兩日ハ於てハニユーイン、ニユーアルクレット、フォールド、ミスタルトン、オヅアルソル、及びエアウォルスに於て説教

せしが八十三歳の老翁にして二日間に六ヶ所おて六回の説教をさせるは實に驚歎すべきにあらずや、ウエスレー記して曰く「一千七百八十六年六月三十日予はハルンスレーに向へり此地の有名なる暴悪の地おして幾時メソヂスト傳道者を殘害して毫も顧慮する所なき狀況なりしも今の全一變して一匹の犬だも一聲の妨をなすなきに至れり予の市場の近傍に於て夥多の聽衆に向て説教せしが其語は深く彼等多の者の心裏に入りたるが如し誠に神は其聖民を此所にも起し給ふなるべし」とウエスレーがハルンスレーの暴悪なりしを云へるは寔に故あるとよして三年前に於ては一人ヘンリー・ロングデンを殺さんと欲し氏が説教中突然走り寄て最後の一撃を加へんとせしも氏其席を跳び退て僅に之を免かるゝを得又セレミヤ、コツカルは市場にて説教せし際暴民等の爲めに引き倒はされて市中を曳き廻はされ且つ腐卵を擲さき又一度は數百の暴民等角太鼓等の鳴物を以て大に説教を妨げたるにありたり、ウエスレーはハルンスレーよりセフヒールドに赴き今は寢より覺むべきの時なりとの題を以て説教し而して數

日間其地に留まりて四季會を開き愛餐を行ひ且つ六七百の會衆を聖餐を施しシヨセフ、ペンソンの嬰兒に洗禮を施せり氏はホーリー氏の客となりしが説教後其客宅に歸るに當り群衆氏に追隨し市街の兩側及び各家の窓戸は皆人の山をなし而してウエスレーは行く／＼を空ふして貧民を賑はせり斯くて夥多の人民ホーリー氏庭前の草地に群衆したるばウエスレー彼等の中お進み入り跪て神の彼等を祝福し給はんとを祈り然るに入民の氏に別るゝの思ふ堪へず甚く痛哭せしがウエスレー再び祈禱して後急よホーリー氏の宅に入り以て僅に身を匿くせり

プリストル年

ウエスレーは殆んど二十週間の巡回の後七月十三日ロンドンに歸り四日の後年會の爲めに復たプリストルに向て出發せり氏記して曰く

「七月二十五日(火曜日)此日年會を開き凡そ八十の傳道者之も出席せり我儕午前六時九時及び午後二時に會合し火曜日と水曜日との朝を以て傳道者の品行を査察し木曜日の午後にはプリストル會友は誰よても出席するを許し而して教會分離問題も付充分の討議をなせり我儕此



時一人の反對なくして從來の如く繼續するとに決定せしが予は此決定は少なくとも予が他界に移さるゝ迄は動かざるべきことを疑はざるなり當年會の八月一日(火曜日)の朝を以て閉會せしが多くの人々は此年會に於て烈しき討論あるべきことを預期せしも神の恩恵に依り毫も然るとなく大に靜和にして凡ての事を處理し會合の時と同様なる平和と愛とを以て相別れたりと

夫の教會分離論は再び當年會に於ける一大問題なりしが右の日誌に依て見ればウエスレーは此時既に其死後に於ては到底分離するに至るべきを認知したるや明かにして其分離の己が死後に起らんとを望みしとも又明瞭なり、此年會はチャールズ・ウエスレーの列ありたる最後の年會にして氏は此年會の終末に於て其愛する我其三分の一を携へて火に入らんと云々(三ノ)を題として一場の説教をなし會衆に告て自分と其兄弟の死後に於てハッヂスト教徒中又分裂を來たし忠實に英國教會員として殘る者は僅に三分の一に過ぎざるべきことを云ひ且つ神は其等少數の者の上に聖靈を

降して其事業を昌へしめ給ふべきことを云へり

ノヴァ・スコシャ、ニューファウンドランド及びアンテギニアの當時各々メソヂスト巡回とありて九人の巡回傳道者は等の地方に働き信者の數凡て二千百七十九人ありたり、是等はメソヂスト宣教地(未だ斯る名稱を有せざりしと雖ども)としてメソヂスト傳道會社の創立は實より一千七百八十四年ありしなり、夫のヨークの此年米國に渡航し翌年即ち一千七百八十五年の年會の時歸國したるまゝ其後は全く身を傳道會社の事に委せり

ウエスレープリストル年會後一週日にしてブロードベンド及びブラツクンベリーの両氏と共に和蘭に向て出帆し其國にて許多の教友と交はり屢々人々の私宅に於て聖經の講話をなし又其國許多の美景を遊覽し而して閑時を得る毎に執筆の勞を取れり、九月五日ロンドンに歸り説教及返翰に二日を費したる後再びプリストルに向て出發し九月二十六日迄其地に留まりて後ロンドンに歸り左の如く記せり、予の予が手の及ぶ處にある最良の材料を得て今フレッチナエルの傳を書くことに熱心せり予の十一月迄

ウエスレー復  
び和蘭に赴く

フレッチナエルの傳を書く

暇を得る毎に午前五時より午後八時までの時間を此事に費せり是れ予の勉學の時間にして是より長く筆を執る時は眼を害するの虞あり、八十三歳は老翁一日十五時間間斷なく業を執る我儕之を何とか評すべき、十二月十二日氏記して曰く予は今秋中一二度少しく不快ありしことあり然れども是只毎度一二日間過ぎざりしなり過ぐる十年間に於ける予が健康の概して其以前に於ける何れの十年間の健康よりも勝れり嘗て愛爾蘭の北部にて熱病に罹りし以來身体一新して復疼痛疲勞を感ずるとなし是れ蓋し主のよし給へる事にして我儕の目に奇しとする所なりと

十月の始め氏はチャサム及びビシールテスに赴き夫よりノルフオルクに向て出發し而して次の五週間のロンドンに在りて或は説教に或は諸組の集會に或は又フレッチェルの傳記著述に従事せり

一千七百八十七年 八十四歳

ウエズレー記して曰く「一千七百八十七年一月一日(月曜日)我儕午前四時集會を開きしが會する者實に夥多なりき……」と氏は常に凡ての有益

貧者の爲に勞す

ある事即ち讀書、執筆、説教、祈禱、及び貧者の爲に集金する等の事をなすに敏捷なりしが晩年に至りては殊も同胞人類の困難を救ふの勞を執るを以て殆んど毎年初發の役務をなしたるが如し故に此年に於ても始め五日間の之を爲にロンドン市街を上下し大に義捐金を募れり氏がロンドン會友にして凡そ二百人の當時大なる困難の中にありたれば氏は是等の者と共に其他斯る困難中に在る者と共に少なくも衣服と食物とを支給せんことを望めり其曰く「予は大に失望せり我儕の兄弟にして十パウンドを出せし者の實は六七人に過たざりき若し四十或は五十の兄弟等之と同額に義捐をなしたりせば予は其企圖を實行するを得たるべきに事竣に至らざりしは甚だ遺憾あり然れども其鳩集したる二百パウンドの金に能く許多の痛める心をして歡ばしめたりと

是より七年前にウエズレーは始めてトレント河畔のニューアルクに於て説教せしが今の新講義所を開く爲に其地を招かれ一月九日馬車にてロンドンを出發し晝夜兼行次日其所に達せり氏翌十一日(日曜日)午前九時其

一千七百八十六年

五百八十三

快調歡々べきの講義所ふ於て説教し全午後五時半再び説教せしが此時の  
 當市の市長及び數人の官吏等も出席し居たり氏の當時屢々斯る捧堂式を  
 行ふの場合に遭遇せり二月二十五日(日曜日)ロンドンに於て二回の説教の  
 后郵便馬車に乗て終夜旅行し凡う二十四時間にしてエキセトルに着し夫  
 より急にブリマウスに赴きて其地新講義所の捧堂式を行へり三月四日(日  
 曜日)午前九時半式を始め殆んど午後一時に之を終り而して同夜再び説教  
 せしが開會時刻前より聽衆の群集せると實に甚だしくしてウエスレーの  
 會場ふ來り講壇に近づくに能はず漸く人々に順次其頭上を通過せしめら  
 れて之に達するを得たり翌朝五時再び大衆に向て説教し全六時其云へ  
 る如く從來嘗て見ざる火炎を残して其地を出發せり氏は前日の重き勞働  
 ありしにも拘はらず終日雨を冒してエキセトルふ來り再び堂内ふ充溢す  
 る聽衆に向て説教し而して左の如く云へり予の未だ嘗て斯る感覺をエキ  
 セトルの人民に與へしとあるを知らず

三月十九日氏のプリストルを去て愛爾蘭に向ひし途中小トラウド、

群衆の頭上を  
 經て講壇に到  
 る

愛國に向ふ

ボルスレムに  
 於けるウエス  
 レー

レンセストル、グローセストル、及び其他許多の所ふ於て説教しボルミン  
 グハムに於ては七八百人に聖餐を施しウォルヴァルハンフオンに於ては新  
 講義所の捧堂式を行ひ又ボルスレムに於ては聖餐を行ふに當り聖靈非常  
 の能力を以て降臨し給ひしを斯る現象は國中嘗て見ざる所なりと云へり  
 殊に著るしかりし祈禱會の時にして一日の中に義とせられし者十五人  
 乃至二十人及びべり而して其中或者は國中の最悪人なりしと云ふ氏は三  
 月三十日午前五時説教を始むべきとを廣告せしも人々四時頃より唱歌  
 音樂等を以て氏を待ちしかば氏は是に次で直に説教を始めた時未だ四  
 時半頃なりしも人々は既ち會場の階上階下に充満し居たり○四月六日マ  
 グリンに着し而して十日の後各地方の巡回を始めたり當時マグリン會の  
 ロンドン會を除き世界中最大の會として會友一千一百人を有せりウエス  
 レーが地方巡回の狀況は前年と異なるとなくして常に迫害なきのみなら  
 ず到る所人民大に愛敬の意を表して氏を迎へ先を争ふて歡待せり又神の  
 事業は殆んど凡ての所に於て昌へ行くの狀況なりき氏は六月二十一日マ

ジョン、ハワ  
ルドとウエス  
レー

ブリッジに還りしが此十週間の巡回中各地に於て説教せしと百回以上上  
れり、夫より一週の後即ち六月二十八日(誕生日)氏記して曰く、此日予ハワ  
ルド氏と語るの愉快を得たり予は氏を以て歐洲中最大人物の一人と思考  
す、實に神の大能の外何者も氏をして其困難にして且つ危険なる業務を執  
らしむるを能はざるなりと

此大慈善家のウエスレーが己を喜びし如く亦ウエスレーと喜べり即ち  
氏はアレキザンドル、ノックス侯告て左の如く云へり予はウエスレー氏  
に由て大膽に予の計畫に向て進行すべきとを奨励されたり予は一個人に  
して其熱心と忍耐を由り何程の事業を成就し得るものなるか之をウエス  
レー氏に於て見るを得たり予の思へり若しウエスレー氏にして氏が事  
業を成すを得たりせば何を以て予と雖も若し勤勉忍耐せば予が事業を  
成すを得ざるとあらんと、依て予は今後一層の勇氣を以て予が事業に従  
んと決心せり、ハワルドは若年の時ベッドフォードシャーに於てウエスレ  
ーの説教を聴き深く之に感服たるとあり、氏は一千七百八十九年ウエスレ

ーをロンドンある其宅に訪ふて其近著歐洲中首要なる傳染病院の事情を  
之と贈らんとせしむウエスレー不在ありしを以て願くは予が尊敬と親愛  
の意をウエスレー氏に通じ且つ予今一度氏を見んとを望んで來りしも不  
幸にして見るを得ず、併し或は生前再び相見るを得ん若し得ずんば一層勝  
れる世に於て相見んどの一言を氏に傳へられよとの言を残して去り後慈  
善事業の爲めに魯西亞へ赴きしが遂に其國に於て果なく其事業の爲に斃  
れたり時ハ一千七百九十年一月二日なりき

ウエスレーは愛爾蘭年會を終り七月十一日メブリンに於て離別の説教  
をなして後英國に向て出帆し同十二日英國に著し夫よりマンチエストル  
へ進み八月六日迄其地方に滞在せり此際氏は英國年會を其地に開きしも  
氏が日誌中には一も之と關する記事なし

當時メソヂスト教派は愈々盛大に赴き當年中會友の増加は英、蘇、愛の三  
國を合せて殆んど四千人米國に於ては六千八百四十九人なりき一千七百  
八十七年八月附米國發の書翰は實に驚くべき通信にして其中にはヴォル

斯派當時の狀

デニヤのフランススウィック郡に於てハ深く己が罪を認め居る者七千人に下らずして改心者の數は日に五十人の多きあると言ひ且つ最近の四季集會に於て人々の集まると六千其中數百の者ハ號叫して憐れみを乞ひしが其中にハ該地に於て名ある人々及び迫害者よりし者も少なからざりしことを云へり

マンチエストル年會ハ八月四日(土曜日)に終り次日ウエスレーハ一の集會と二回の説教をなし且つ同僚教師等ハ補助を得て一千二三百の大衆ハ聖晚餐を施せり

一千七百八十五年六月ポルトンの舊リツヂウエイ、ゲーツ講義所に於てメソヂスト安息日學校の設けありしが是れ専らジョーシ、エスクリツクよ由て成りし者にして氏は世を逝る迄其學校を主管せり夫れ巧みなる唱歌ハ甚だ望ましき者なるが又甚だ得難き者なり故に若しポルトン日曜學校よして其結果は只之巧みある唱歌にのみ止まれりとするも尙其學校の存在は全く無益にはあらざりしなり然るに其結果の大に之よ勝るものあり

ポルトン日曜學校—他者の

しはウエスレーの言に依て明かなり、今日の各メソヂスト日曜學校教師ハ左に記載する氏が言を聞き己が學校を以てポルトン日曜學校よ倣はしめんことを期し大に奮勉努力せざるべからず、即ち氏ハ一千七百八十八年四月二十日(日曜日)に於て右ポルトン日曜學校ハ關し左の如く記せり

「八時に於ても一時に於ても學校全く充滿せり、予は凡そ三時に生徒を會せしが集りたる兒童九百人乃至一千人に上れり予は未だ嘗て斯る壯觀を目撃せしとなし彼等ハ皆清潔淡泊且つ靜肅にして其動作大に見るべき者あり而して其中許多の男女兒ハ英國中、否歐洲中第一流の美なる顔貌を有せり其唱歌するに當りては一人も不調子なる者なく其調和の巧妙なる眞に演劇も勝れり、而るに凡て是等の者よ勝りて稱歎すべきは彼等の中多くの者の眞に神を畏れ其教を喜べるとにして是等ハ實に其邑ハ模範たるなり、彼等が通常の樂みの六人八人或ハ十人共よ貧しき病者を訪ひ而して或は勸め或は慰め又或は共に祈禱せるとにして又時に十八二十人或は四十人共に集まりて或は歌ひ或ハ祈り又は叫びなど

して互に別るゝに忍びざるあり

ウエスレーがマンチエストルの年會を終へたる翌日二回の説教をなし且つ一千二三百人ハ聖餐を施したる事は既に記述せし處なるが氏は其翌日即ち八月六日己と其朋友の爲にマンチエストル、ボルミングハム間を往來する馬車を借り切り六人の室内に八人の室外又密座して夜半マンチエストルを出發せり(然るに斯く十四人のメンヂスト傳道者ありしよも拘りらず毫も不慮の災害に對する保險あるとなかりき)彼等清空又燦々星を戴きチエシールの美景を兩側に於て軋しり往くの際は必ずや多くの讚美歌彼等が口頭と突て迸出し以て草木亦睡るの静夜を突き乱だせしなるべし然るに殆んど午前三時に垂んとしコンダレットンに近づきたる際忽ち馬車其重量不堪へずして破壊し遂に他の馬車に移りしが其馬車も亦一時間を出でずして跛となり剩さへ一匹の馬ハ大に疲勞して殆んど進行する能はざるに至れり斯く種々の困難を経て其距離甚だ遠らざる路程を往くに十九時間を費し午后七時に至てボルミングハムに着せしがウエスレーハ

道中の困難、ウエスレーの驚くべき勞働

會衆の氏を待ち居るを見馬車を下て直に講義所に入り時を移さず説教を始めたり氏曰く神の恩寵に由り予は終日休息したると同く毫も疲勞を覺へざりきと是實に八十有餘歳の老翁に在て最も驚くべきことなるが實に此に止まらず氏は翌朝五時前に此地を出發し殆んど十一時間の旅行をなして其夜グローストルの新講義所へ於て説教し翌朝二時に其地を出發して午後四時半迄旅行し而して其夜サリスベリーに於て説教し翌朝四時驛車に乗てサウスアンプトンに赴き其所にて八月九、十兩日間ハ三回の説教をなせり

ウエスレーは博士コーク及びジョセフ、ブラッドフォードと共にチヤンチル諸嶋に赴きたり、抑此諸嶋ハメンヂェスト教派の傳はりたるは一千七百八十三年の事にして當時ゼルシー、ゲルンシー、及びアルデルニーの三嶋に於けるメンヂェスト諸會の會友は凡て三百人ありき、八月十一日(土曜日)ウエスレーハ右二友と共にサウスアンプトンよりゲルンシー嶋へ向て出發せしが未だ日没に至らずしてワイト嶋のヤルマウス港に入泊せざるべから

チヤンネル諸島に赴く

ざるに至り月曜日迄其港に泊まれり然れどもウエスレー等は兵等の時日を空費したるに非らず其間市場に於て四回の説教をなせり月曜日又至り風波漸く平穩になりしを以て其港を出でしが午后に至り再びスワチーツ又風を避くるの止むを得ざるふ遇へり此地にハ一小會ありウエスレーは其日プレスビテリヤン講義所に於て説教し後再び出帆して火曜日午後ハゲルンシーに達せんことを期せしモ暴風の爲に更にアルデルニー嶋に向て駛せざるべからざるに至り而して該嶋の港に入る後も辛ふじて船を破碎するの危厄を免かれ漸く其地上陸するを得たり彼等五の寢牀を並べたる一室に眠り海濱に於て説教し再びゲルンシーに向て出發せしが今回は難なく其嶋に着しデセルシー氏の懇切なる歡迎を受けたり彼等此地に五日間滞在せしが其間又ウエスレーハ七回の説教をなし又嶋司の宅に食せり八月廿日月曜日彼等セルシー嶋に上陸せしが大風の爲に廿八日迄其地に阻められたり其八日間にウエスレーは十二回の説教をなしブラックンベリー之が通譯をなせり廿八日ゲルンシー嶋に還り暴天氣の爲に九月

六日迄該嶋又阻められしも其間例の如く絶へず活動せり彼等遂にコルンウオールのペンザンス又安着したり○チャンチル諸嶋に於けるウエスレーの働は大又好果を來たせしも其船路ハ甚だ險難にして屢々非常の危険に迫りしとありたり然るにウエスレーハ是等愛すべき諸嶋あしたる旅行を以て大ハ満足し左の如く云へり爰に福音の門戸開けて貴賤貧富の差別なく皆喜んで神の道を受く故に予は逆風の爲ハ數日間預定外の滞在をなせしも尙之を怨まざるなり」

九月十四日ウエスレーブリストルに着し次の三週間は此地に滞在せしが二人の朋友の補助を得て第一に手を下せしは過る五週間に滞留せし夥多の書翰又返書することなりき氏は夫より周圍の諸會及び夫の暴民等が最初の傳道者を池又没したるキャスツルカレー又於ける會を訪ひ十月八日ロンドンに還れり氏の此年終の三ヶ月間をロンドンと其近傍諸郡の巡回とに費せしがロンドンに於ては例年の如く説教をなし諸組の集會をなせり此諸組會を開くとハ氏ハ爲に煩勞なる業務なりしが氏は是に就て左

の如く記せり、一千七百八十七年十一月十九日—此日予の諸組を訪ふの不愉快なる働を始めたり、他の諸會に於ては、各々其會の助手予を代て此務をなすもロンドン、プリストル、コルク、及びダブリンに於ては、今尚予自ら之を爲せり」

一千七百八十八年 八十五歳

此年の始め二ヶ月間の事ハウエスレーの日誌存せざるを以て詳かに之を知るの由なしと雖ども諸書翰の示す所に依れば其間氏はロンドンに留まりしと明かなり

ウエスレー兄弟

今チャールス、ウエスレーの漸く死期に近けり、ウエスレー兄弟ハ長く友愛と信實とを以て相結び時々意見を異にするありしも其愛憎に至ては決して變ずるとあかりき其最も甚だしき意見の差異は教會分離の事、按手禮の事及び聖餐を行ふ事等に在りしがチャールスは是等の事に關する書翰に於て「強き語ハ之を用ひしも決して不親切なる語を用ひざりしなり」氏ハ其兄弟の死後に於て「メソヂスト教徒の英國教會より分離すべきとを

知りしや明かにして氏ハ彼等が其中の最良の人物に由て支配されんとを望めり又ウエスレーが其兄弟を愛せしとハ一千七百八十八年二月十八日の左の簡單なる書翰に由ても明かなり

「拜啓御身ハ若し毎日外出運動を勉めざれば世に存ふると難かるべく候、御身は今死すべきの時にあらず其役務の爲ハ尙暫し世に存ふべきも、ハ御坐候、又予が在世中は御身何をも配慮なさるに及ばず候敬白

「ジョン・ウエスレー」

此書翰を興へてより十日の後ウエスレーロンドンを去り例の長き北部旅行の途に就けり氏曰く「予再びロンドンを見るを得ば善し若し見るを得ずハ予ハ神が其事業の爲に一層忠實に且つ一層成功ある人々を興し給はんとを祈る、予は年の邁みより第一に活潑力を減じて行步緩く殊に登坂ハ於て然り、第二に記憶從來の如く敏捷ならず、第三に予ハ蠟燭の光に由て能く讀むと能はざるに至れり、然れども予ハ神に謝し其他の点に於ては肉體に於ても精神に於ても敢て従前と異なるとなし、是より一ヶ月の後氏は

ウエスレーハ  
が老衰を自覺  
す

チャールス、

一千七百八十八年

五百九十五



ウエズレーの死

兄弟の此時の別れを兄弟最後の別として永き安息に入り而して天に於て再會せし迄復相遇ふとあかりき、チャールズ・ウエズレーの三月二十九日、世を逝りしが、シタイ、ロード、循回の補助傳道者サムエル、ブラッド、ポルン直に右訃音をウエズレーに送りしも誤て配達遅延し漸く四月四日即ち埋葬の前日に至りウエズレーの許に達せり然るもウエズレーは此時マクレス、ヒールツ、お在りしを以て其葬式前にロンドンお歸着するとは素より出來得べからざる事なりしなり、氏は敢て己が心中の大なる悲哀を告白するとをせざりしと雖ども深く其兄弟の死を哀しみ居たりしと明かなり、十四日の後、氏のホルトンに在て集會をなせる時一の讚美歌を撰び共に之を歌ひしが歌ふて、わが伴侶は先きよ逝り、我は獨り残されにき、今儂なるは只我君のみの一句よ至り感情制し難く痛く涙に咽んで講壇に坐し両手を以て面を覆ひしが集まり居たる大衆は直に其何の故たるを悟りたれば唱歌の聲頓に止んで場中忽ち肅寂となれり、暫くにしてウエズレー漸く面を上げ再び立て説教せしが此時爰に在りし者は決して此日の事を忘れざりし

ウエズレーの悲哀

と云ふ

是れ此驚くべき人物(チャールズ・ウエズレー)の生涯及び其品性お關する批評を掲ぐべきの所にあらず又之をある餘白なきを以て我儂の只左の數言を陳べて満足すべし、抑も氏が爲したる事業ハ單にメソヂスト教徒及びキリストの教會一般の爲に夫の比類なき讚美歌を備へしのみならず、亦も眞理と敬虔の發達増進の爲にその教會に與へたる利益は實に廣大おして言語の能く盡す處にあらざるなり、幾百万の人々は是等れ著作よ由り一層敬虔の念を以て天の神を禮拜し己お百三十年の間氏が詩と歌と靈に感じて作れる賦ハメソヂストと稱する一派の常お用ひて無量の裨益を受くるのみならず其他無數の者おも裨益せり

我儂今ウエズレーの記事よ移らん、氏は二月の末日にロンドンを去りバス及びブリストルに赴き三月十七日北方に向て出發せしが到る處聽衆夥多にして屢々寒天屋外に立て説教するの止を得ざるお遭遇せしことあり氏は八週間にして蘇格蘭の國境に達せしが其間五十七の都邑村落

チャールズの一大事業

北部巡回

に於て八十四回の説教をなせり、五月十三日氏はダムフライを訪へり此地  
 には一千七百八十七年の年會ふてロベルト・ドールを遣はせしが未だ講義  
 所もなく會の組織もあかりしもドール氏は熱心誠實に此地の爲に働けり、  
 ウエスレーが次々留まりたるハグラスゴーにして此處より三日間滞在し  
 て六回の説教をなし次にエデンポリーに赴きて左の如く記せり予は今日  
 尙エデンポリーの人民の甚だ質朴淡泊なるを見る、斯る人民の國中稀に  
 見る處なり、五月二十五日ニューキヤスルに着し次の十四日間ハ此地を  
 以て働の中心となせり夫より進んでホヰットビーに到り其處にて新講義  
 所の捧堂式を行ひしが此時其講義所の未だ全く成就し居らずして人民は  
 回廊に上るゝ梯子なきが爲に講壇の側なる一窓よりし又回廊には未だ欄  
 干なきを以てヨルクシールの勇敢なる壯年等回廊の縁端に腰掛けて背を  
 以て聴衆を支へたり足ハ階下聴衆の頭上より垂れたりウエスレーはホヰッ  
 トビーに留まると二日なりしが土曜日にハ二回の説教をなし日曜日はハ  
 三回の説教とヨルクシール愛餐式を行へり夫より諸所を経てホルム到り

誕生日

副教長クラルク氏の請に由り高派教會にて二回の説教をなし又ペンソンの  
 講義所にて三回の説教をなせり前日の重き働きにも拘はらま此既に八十  
 有五歳の高齡に達せし老翁六月二十三日此地を去り管にヨルク運旅した  
 るのとなりす其間四の市邑に於て四回の説教をなせり又進んでエアウオ  
 ルスに到り其處にて己が誕生日を迎へ而して左の如く記せり

「六月二十八日予ハ此日を以て第八十五歳の誕生日と爲す上れ  
 り予は正々如何なる言詞を以て神を讚美すべき乎、神は當に百千の靈の  
 賜を與へ給ひしのみならず亦肉体上の恩恵をも與へ給へり、實に予ハ此  
 多年の間に身体の苦痛を覺へしと甚だ稀なり素より今の往時れ如く敏  
 捷ならず歩行に速かならず眼力少しく衰へて左眼の如きは殆んど皆を  
 讀むに堪へず右方の眼球及び右髪數ヶ月前に墜ちし所又右肩と右腕予  
 ハ其之を挫傷とリニューマタイズムに歸すに毎日少しの痛みを覺へ且  
 つ近時見聞したる姓名事物等に關するの記憶多少衰へたりと雖ども二  
 十年四十年前或は六十年前に見聞したる事物の記憶、味、及び食欲食物の

量の往時の三分の一も過ぎざるも等の諸能力も至りて、更に異なると  
 かく加之旅行に於ても説教に於ても敢て疲勞を感ずるとなく説教を草  
 するは於ても亦昔日と些少の差異あるを覺へず予の昔日の如く快速に  
 誤まりなく之を草するなり……」

ロンドン年會

ウエズレーは是より七月十五日即ち其ロンドンに着せし迄二週日の間  
 に毎日平均二回の説教をなし全二十九日より八月六日迄年會を開けり其  
 間氏の音に議會を司どりしのみならず毎夜一回日曜日おは二回の説教を  
 なし閉會の日ハ之を斷食日とあして午前五時九時及び午后一時ハ祈禱會  
 を開き而して守夜會を以て其日を終れり其斯の如くなりしを以て當初の  
 メッヂスト傳道者等が年々其年會より火災を抱持して各自の任地へ歸り  
 しハ決して怪しむべきとにあらざるなり○八月十日に至りウエズレーは  
 ウェールズ及び英國西部の地方に向て出發し通常毎日二回日曜日に於て  
 ハ三回の説教をなせしが到る處夥多の聴衆あるを見たり九月二十八日ロ  
 ンドンに歸り二日の後ノルfolkへ赴き而して此年爾餘の時日の例の

逸事

如く之をロンドンと其周圍の諸郡巡回に費せり是等の旅行は霜雪深き冬  
 日の旅行にして決して愉快なるものにあらずしも此高齡の老翁は其間  
 無數の雜務を處理したる上に殆んど毎日朝夕の説教をなせり

氏はクリスマスの日シテイーロードに於て午前四時と十一時又説教し  
 同夜にはウエスト・ストリートに於てせり又此年最終の日曜日にはロンハル  
 ド街のオールハロース會堂に於て夥しき聴衆に向て説教せり茲に一逸事  
 の記すべき者あり此時の説教はセント・エセルホルガ會に屬する四十八人  
 の貧兒の爲に合せし者なるがウエズレー説教を始むる前法衣を着するの  
 際其從者を顧みて左の一語を語れり予は此會堂に於て始めて説教したる  
 は今より五十年前の事あるが予は其時の特別なる事柄に由り今尙明か  
 之を記憶す予ハ其時説教草稿を持たずして此より來り講壇へ上るが當り少  
 しく躊躇し心中甚だ安からずして再び裝束室へ返へりしが傍に立てる一  
 婦人予が異様なる状態を認め予に「何事なるや」と問へり予は之に答て「予は  
 説教草稿を携へ來らざりし」と云ひしらば婦人は手を予が肩に按き「只夫の

みなるや、足下は神に依頼して説教する能はざる乎と云へり、予此一言も剛  
まさされ直に講壇に登りて説教せしむ自ら大に自由を感じ聴衆にも満足を  
與へたり、予は此時より以來決して説教草稿と講壇に携へしことなし……」

一千七百八十九年 八十六歳

ウエスレーの日記中に左の記載をなせり

「一千七百八十九年一月一日―若し此年にして夫の諸ろの預言の如く  
予が在世最終の年なりせば予は之が最良の年ならんことを望む……」

一月五日―予は今一度撮影せり、ロムニー氏は實も巧みなる歯工あり氏  
は暫時にして精細なる撮影をなせり

一月十一日―予の復び力を極めて會衆の世も傲ふをみからんことを警戒  
せり然るに誰か其警戒を受け容れしや、假令之を受け容れし者は十分の

一に足らずとするも予が記録の至上者の許にあれば愛ひあし」

一月の終り於てウエスレーはライ及びウヰンチエルシーに赴て新講義  
所の捧堂式を行ひ後ロンドンに歸て二月中其處にて説教、執筆、諸組及び定

年初日誌中の  
記事

長旅行  
愛國に向ふ

海上の病苦

住傳道者の集會等をなし且つヘンリー、マイル及びトーマス、ランキンと接  
手禮を施せり氏が其傳道者に接手禮を施せしは之を以て終りとす

三月一日(日曜日)シタイ、ロードに於ける二大會衆に向て説教したる後  
三人の傳道者と共馬車にてバスに赴き其自ら云へる如く「熟睡と讚美と  
を以て楽しく其夜を過せり斯く此八十六歳の老翁終日勞働の後寒夜七  
時の出發を以て向ふ五ヶ月間各地巡回の長途に就けり氏はバス及びブリ  
ストルに於て説教と諸組の集會とに二週日を費やし後愛爾蘭に向て出發  
せしが途中ホルミングハムに於て新講義所の捧堂式を行ひ左の如く記せ  
り「三月二十一日―予は此日休息して只朝夕の説教をなしたるのみなり、現  
今ハローリーヘッドよりダブリンに航するは僅か四時間にして足ると  
なるがウエスレーは此時三十六時間を費し殊に甚だしく病苦に悩めり氏  
記して曰く「予は未だ嘗て海上に於て斯く病苦に悩みしとあるを覺へず殊  
も其拘擥の如きは殆んど終夜間斷なく予を悩ませり」と氏は日曜日の朝八  
時にダブリン港に着し海上の病苦ありしにも拘はらず直にダブリン講義

一千七百八十九年

六百三

難症を患ふ

誕生日

所へ往て説教し而して後凡そ五百人の會衆に聖晩餐を施せり、四月十三日  
 ダブリンを去て各地方の巡回を始め六月十九日に至て同所に還りしが此  
 九週間の旅行中六十餘の市邑に於て凡そ一百の説教をなし屋外に於て  
 は少なくとも十二回會堂に於て六回又牛舎に於て一回の説教をなせり、此際  
 若干日の間は氏痛く尿淋症（氏は此時始めて此疾を得たり）の爲お苦しみ、  
 ドンの醫師ホワイトヘッド氏に書を寄せて之が治療法の教示を乞ひしが  
 後ホ氏の治療に由て大に快復せしむ其死する迄多少之が爲に苦めり、ダブ  
 リンと其近邑に三週日を費やし其間諸組を歴訪して凡そ一百の會友を除  
 名せしむ尙殘れる會友は一千有餘人なりき氏又愛爾蘭年會を開き六十人  
 の傳道者中四五十人は之を臨めり、且つ此處にて其誕生日を迎へ左の記載  
 をなせり

「六月二十八日―此日を以て予は第八十六年（第八十七年の誤なり）の旅路に上れ  
 り予は今自ら老衰しざるを覺知す即ち第一に視力衰へて強明なる光お  
 依るにあらざれば細字を讀むと能はず、第二に体力衰へて數年前の如く

愛爾蘭最後の  
訣別

快捷に歩行すると能はず、第三に記憶力衰へて人名地名の如き暫時思念  
 するにあらざれば案出せると能はざるに至れり、予は此後肉体に由て精  
 神の壓服され而して智力の衰弱より執拗に陥り或は諸病の増加に依  
 り性急者とならんとを恐る、然れども主なる我神よ爾ハ我爲に善きをな  
 し給ふべし」

遂にウエズレーは七月十二日に於て愛爾蘭に最後の別を告げしが此時  
 の狀況は宛然一の悲劇にてありき、夥多の人々海岸迄氏を従ひ往き而して  
 氏ハ一の聖歌を讀みて之を歌ひ始めしが衆人之お唱和せしも胸中の感情  
 制し難く能く之に和するを得ざりき、夫よりウエズレーハ跪きて神の彼等と其  
 家族と教會又愛爾蘭とを祝し給はんとを祈りて人々と訣別の握手をなせ  
 り此時多くの人々痛く歎き悲しみ氏が頸を抱て接吻せし者も少なからざ  
 りき、氏遂に船に乗り両手を舉げて祈禱しつゝ順風は誘はれて其大に愛す  
 る嶋國を去り去が此國の愛情篤きメソヂスト信徒等ハ地を於て復び氏が  
 面を見るとなかりき、ウエズレーの同行者ウヰリヤム、マイリス曰く「我儕ハ

航海中多くは讚美歌を歌ひ且つウエスレー氏の説教等ありて實に愉快なる航海をなせり」と彼等の此航海に凡そ三十六時間を費せり

ウエスレーのナエストル及びノルウヰッチに於て集會をなしたる後マシチエストルに赴き其處にてコックと共に凡そ一千二百の會衆に聖餐を施しデユースベリーに於ては雨を冒して屋外説教をなし夫より年會を開かんが爲にリーズに赴けり氏は例年の如く年會を司どりたる外毎日説教をなし而して日曜日の説教は全く之を他人に譲りたるが如しと雖も自ら手を空ふして其日を送りしよあらず即ち氏記して曰く「予は三人の教師の補助により一千五六百の會衆に聖餐を施せり」と年會を終りたる翌日氏のロンドンに向て出發し夫よりコモンウオールに最後の旅をなせしが第一日には七十英里を行き第二日ハ八十英里を進み加之其間諸所に於て説教をなせり、ロンドンにては一日の雜務に費去次の日即ち日曜日にはシテイーロードの講義所に於て二回の説教をなし而して午后七時より終夜旅行して月曜日の正午ホブリストルに着せり、其後氏のセント、オーステ

リソ年會

ウエナツプ  
天然劇場

ルに到りて左の如く云へり「市街は汚穢にして會場は狭く予は何處に於て説教すべきやを知らざりしが遂に止を得る會場に於てしたり此時我儕は實に神の我儕の中に入し給ふを見たり」氏がファルマウスに在りしは今より四十年前の事にして其時氏の獅子の如く咆哮する無数の暴民の擒どなりしが今は貴賤の別なく親愛の心よりして氏が通行する市街の両側に山をなせり、又ウエナツプの凹所に於ては會衆の數二万五千よりしと云ふ、抑此有名なる場所は一千七百六十二年ウエスレーが始めて説教所となしたる所にして氏は其時強風の爲に常例の如く邑中に立て説教するを得ずして此凹所を説教所となせしなり氏曰く「小巨離の所に數千人を容るべき凹所あり予の其圓形天然劇場の一方高き所に立ち人々の其下方に居れり」と氏は其後屢々此國中最良の天然劇場に於て實に驚くべきの異觀を目撃せり其聽衆の數に關しては時に或は過算なきを保し難しと雖も然れどもウエスレーの一生中最多數の聽衆に向て説教せしは此コモンウオールに於てなりしとは確實なり、ウエスレーの死後毎年此凹所に於て集會を開

一千七百八十九年

六百七

き今日尙毎ホヰットモンデー(主復活後)にハ貴賤貧富の差別なく四方より此處に集ひ來りて宗教上の集會をなし共に天の神を禮拜せり、斯くコルンウォールメンヂスト信徒は毎年此所に來集して父祖等が受けし神の恩恵を記念し且つ神の己等と其子孫とに祝福を垂れ給はんとを祈れり、ウエスレーハ十一月間コルンウォールに留まりしが其間十七回に下らざる説教をなし其中九回は屋外に於て之をなせり又コルンウォールよりプリストルに還る旅中七日間に十一回の説教をなせしハ氏が時に午前三時に旅行の途に上りたるは寢お故あるあり、九月五日より十月四日迄氏のプリストルを以て勞働の中心となし或安息日には己が講義所より於て二回アンブル會堂に於て一回の説教をなせり然るに氏は「是れ予が力の限りなり、予ハ此後一日二回以上の説教をなすの當否を疑ふ」と云へり、十月五日午前四時プリストルを出發してロンドンに歸り左の如く記せり

ウエスレーの健康

「予ハ神の善良なる攝理の下に在て健康なり恐くは予が存命中は斯くあるべし、予ハ視力衰へて蠟燭の光にて書を読む能はずと雖ども執筆に

於ては前と異なることあり又予が體力大に減じて一日二回以上の説教をなすと易からずと雖ども予が記憶の衰耗ハ大ならず又智力の明晰なるは敢て五十年來と異なることなきなり」

氏はロンドンに留まると五日にしてノルフォークに赴き而して此年の剩餘は例の如くロンドンと其近傍の諸郡に費せり、此年最終の日曜日於て氏は己が所屬の會堂セント、ルークスの講壇に立ちしが自ら「時運一轉して予が約諾し能はざる程の招聘を諸會堂より受く」と云へり

一千七百九十年 八十七歳

ウエスレーの歴史は漸次終末に近づき而して氏は今樂しき山の頂より立て天城の光輝に沐浴せり、然るハ氏の周圍、否其下界は暗黒混乱を極め一千七百八十九年に於ける暴動は夫の筆紙に盡し難き佛國革命の大變亂の頂点に向て歩を進めつゝありたり

ウエスレーハロンドンに於て此年を迎へし其日誌に記する所左の如し

一千七百九十年

六百九

「予は今眞ふ  
老人となれ  
り」

ジョン・ウエズレー之傳

六百十

「一千七百九十年一月一日―予は今眞ふ老人となれり、予が身体は全然衰耗し両眼は漸く朦し右手大に震ふて口は毎朝熱して且つ乾き加之殆んど毎日多少の熱を有す、而して予は行歩も弱く且つ遅緩なり、然れども予は神に謝し予の勞働は更に遅緩ならず今尙説教をなし又筆を執るを得るあり」

ヘンリー・ムール曰く

「予は此時共に其家に在て氏が斯く記するを見大に驚けり、予の氏が斯くあるべきを知れり然れども其衰耗の斯く大あらんとは想像し能はざりしあり、氏の今尙常例の如く四時に起き毫も怨言なく實に驚くべき意志の力を以て終日許多の役務をなせり」と

一月二日(土曜日)ウエズレー・スノーフィールドに於て説教を翌日曜日(於てはシテイー、ロード講義所に於て契約會を開き殆んど二千の來會者ありたり、氏の夫より數日間を書翰を書くに費せり、二月十七日の日曜日に於ての善良なるドルンフォールド夫人の葬式を司どりて説教をなし午后に

グレート、セント、ヘレンス會堂にて夥多の聽衆に向て説教せり、同二十五日(月曜日)ドルキングに赴きて久しく睡りたる人民(彼等の多年の間進まず又退かず只静止し居たり)を覺醒せんとを勉め、二十九日左の如く記せり「我儕四季會を開きてロンドン會一年の領収及び支辨金額凡そ三千パウンドなるを了知せしが奈何せん其支出額は今尙領収額を超過せり、氏は次の八日間をロンドン諸組會友凡そ二千五百人の集會を費やし二月に於てロベルト、ウヰンドソルの葬式説教及びウエズレー、ストリートとシテイー、ロードに於て兒童に對する説教をなせり、夫より氏はハルハムあるウルフ氏の宅に退居して其説教集を完全し且つ凡ての小雜事を整頓せり、又氏は他人の請を容れて今一度撮影せり

例の北部旅行の長途に就く前二月二十八日(日曜日)に於て氏はシテイー、ロード、ウエズレー、ストリート及びブレントフォールドに於て夥多の聽衆に向て説教し其後ロンドンを出發してバス、プリストル及びキングスウードに於て二週間を費せしが其間毎日説教し病者を訪ひ又プリストル諸組の集

一千七百九十年

六百十一



北部巡回線路の表

會をなし而して其友ジョセフ、イーストルブルック氏のテンブル會堂に於て説教したり翌日曜日には少くも三回の説教をなせり、氏のロンドンを去るに當りて朋友等に左の表を廻はせしが是れ彼等が此北部旅行の線路を知らんと欲せしを以てなり此表により我儕は一見此八十七歳の老翁の驚くべき勞働を知り且つ氏が記録中の不足を補ふを得爰に記憶すべきに二千七百九十年に於ける旅行の便は遙かに今日と異なりし事及び表中の各所に於てウエスレーは必ず一回乃至數回の説教をなせし事なり、又我儕は此表および氏が主要なる諸會にて日曜日を過さんが爲め時に其等の會に於て三四日間の滞在をなせしとあるを見る

「多くの人々今より年會迄の予が所在を知らんとを望むを以て予は左に予が取るべき線路を示せり神若し許し給れば予の年會の時迄此表に従ふべし

三月

十五日(月曜日)―ストラウダ、十六日―グロ―セストル、十七日―ウ

オルセストル、十八日―フト―ルホルト、十九日―ホルミグハム、  
 二十二日(月曜日)―ウエドチスベリ、二十三日―ドツドレイ、二十  
 四日―マデレー、二十五日―サロツプ、二十六日―マデレー、二十七  
 日―ラインの下なるニューキヤスナル、二十八日―レーン、エンド及び  
 ボルスレム、

二十九日(月曜日)―コングレトン、三十日―マクレスフヒールド、

四月

一日(木曜日)―ストツクホルト、一日―マンチエストル、  
 五日(月曜日)―ナントウイツチ及びブリグルブル、七日―ウオリング  
 トン及びチエストル、九日―ウイガン、十日―ボルトン、  
 十二日(月曜日)―ブラツクホルン、十三日―コールン、十七日―ケイ  
 レー、十八日―ハウオルス及びハリフアクス、  
 二十日(火曜日)―ホツドルスフヒールド、二十一日―デニスベリ―  
 二十日―ウエーキフヒールド、二十五日―ボルスタル及びリ―ツ、

一千七百九十年

二十七日(火曜日)―ブラットフォールド、二十九日―オトレイ

五月

一日(土曜日)―パークゲイト、二日―ヨーク、四日―ポックリントン

六日―ニューキヤスソル、

十日(月曜日)―アルンウィック、十二日―ダンバール、十三日―エデ

ンボロ、

十八日(火曜日)―ドンデ、十九日―アルブロイス、二十日―アベル

ディン、

附言予の未だ十分に是より後の計畫をなし居らずと雖もヨルクに到らば之を確定するとあるべし、多くの人々の断へず予に此他多くの市區を訪ふとを強ゆと雖ども彼等若し此表を見ば予の尙餘力あるや否やを知るを得ん

ロンドンに於て

一千七百九十年三月一日

ジョン、ウエスレー

此表には或人左の追加をなせり

「ウエスレー氏に書翰を送らんと欲する者はロンドンに送らずして此表の示す處より従ひ同氏所在の地に送るべし」

「ウエスレー氏の健康の爲に常に(特別に次期の断食日と於て)熱心に祈禱あらんとを乞ふ」

右のウエスレーが次の十週間に於ける旅行及び労働の予定なりしが是を只だ其概略を過ぎずして氏に、此他尙許多の所より於て説教せり

氏はマンチェストルに於て主の復活日に當り二回の説教をなし且つ凡そ一千六百の會衆に聖餐を施し次日アルトリンチャム、ノルスウィッチ、及びチェストルの三所に於て夥多の聽衆に向て説教しウォリントンに於ては静肅なる聽衆講義所に満ち又リグルブールに於ても場内に入るを得ざりし者無數なりき、四月二十一日はハリファクスに於て費し之に續てブラッドフォードに於て説教せり此時氏の睡めきつゝ講壇に登りしに全會衆之を見て痛く涙に咽びたり氏は説教中屢々記憶を失することありて

ブラッドフォードに於けるウエスレー

一千七百九十年

六百十五

セフ、プラットフォールド及びウヰリヤム、ダムソン之を補助せり、爰又此時起りたる一奇事とも云ふべきものは、會衆ウエスレーの來るを待ち而して夥多の人々堂の入口に群集し居りたる際ウヰルソンと稱する一婦嘲哂して「彼等は己等が神を待てり」と叫びしが直に絶息して地に倒はれ翌日に至りて死せり

ウエスレーは五月十日(月曜日)蘇格蘭に向て出發せしが夫より二週間の事ハ記録の存せざるが爲に今之を知るに由なし、氏は五月二十五日アハルダインに於て夥多の聽衆に向て説教し夫よりブレチン、グラスゴー、及びダムフライに於て説教せり、ダムフライは當時グラスゴー循環の一部にしてユードール氏其處に傳道し居たり、氏記して曰く「五月三十一日ウエスレー氏此地を訪はれし、氏の此日グラスゴー(七十英里)より來り体力殆んど盡きて聽衆の氏が説教を聞き得し者甚だ少なりき、氏は又眼力大に衰弱して讚美歌をも聖書をも讀むに能はず、實に氏が生命の車輪は將に其運轉を停めんとする者の如し然れども其説教は智慧と父たるの威嚴と幼兒の無

ダムフライに於けるウエスレー

飾淡泊なるを混交して大に信者の徳を建つるに益ありたり」と、六月四日(金曜日)に至りニユーキヤスソルに着せし、氏が此邑を見たるは是を以て終りとす、氏記して曰く

「予若し私意に従ふを得ば此僅かの餘生を此處とキングスウードに於て送らんとを望む、然れども是れ予が爲し能はざる所にして又予が眞の安息にあらざるなり、此夜と次の夜の會衆は甚だ夥多にして信者等は大に活氣あるが如く見へたり……」と

氏はニユーキヤスソルに於て樂しく數日間を費やし遂に六月十日此地最後の出發をなし難路を經三十英里に下らざる旅行をなしてウイールデールに來り晝夜二回の説教をなせり十一日又はスタンホープとドルハムに於て共に聽衆非常も多くして講義所に容るゝを得ざりしを以て二回の屋外説教をなし十二、十三の兩日はソンドルランドに於て之を費せり、氏は此處まで三回の説教をなせしが一回のメソヂスト講義所、於て次は安息日學校の爲にモンクウエールマウス會堂に於て第三は數千の聽衆に向ひ

誕生日

屋外に於て之をなせり

氏其誕生日に於て左の如く記せり

「六月二十八日(月曜日)―此日子は第八十八年の旅路を始めた。予は八十六歳餘に達する迄眼力体力共壯年の時と異ならずして別に老年の煩ひを感ぜざりしが昨年八月に至り突然變化を來たし兩眼瞠して如何ある眼鏡も用をなさず体力亦予を去て今生に於ては復返り來らざるが如し然るに予の全身毫も痛苦を覺へず只自然の衰耗にして生命の機關漸く靜止する者に似たり」

六月二十九日氏はオーストンに於て聽衆の夥多あるが爲に屋外に於て説教し七月二日(金曜日)ニエートンに於て屋外説教をなしざる後再びケンズボロの講義所お於て説教し土曜日にはエプウオルスに於てし且つ其地會友の集會をなせり七月四日(日曜日)氏は往時父の牧せし會堂に赴きしが其時の會衆は平常の五倍にして聖餐を預りし者は十倍なりき氏はミスデルトンの樹下にて説教し又エプウオルスに於て嘗て見しとなき大衆

ウエスレーが最後の年會(プリストル)

ウエスレーの在世最後の十年間に於ける新派の進歩

に向ひエプウオルス市場に於て説教せり又ドンキヤストル及びプロセルハムに赴きしより三週の後プリストルに於て年會を開きしが是れ氏が開きたる最後の年會にてありきチャールズ、アトモール曰く「ウエスレー氏は既に甚だ衰弱したるが如し氏の實に會衆に歌はしむべき聖歌を撰ぶの視力なかりしなり然れども其強健なる音聲驚くべく活潑なる精神、心意の諸能力及び同胞人類に對する愛は熾んるとは敢て往時と異なることなし」と

ウエスレーの在世中最後の十年間に於けるメソヂスト教派の進歩の實を驚くべきものにして一千七百八十年に於ては英、蘇、愛の三國に於て六十四の巡回ありしが今の二百十五より彼年には巡回傳道者の數百七十一人なりしが今は二百九十四人より上り彼年よりは會友の數四万三千三百八十人なりしが今は七万一千五百六十八人に上り彼年より未だ外國傳道地なる者なかりしが今は宣教師のアンテギニア、バルバドース、セント、ヴァインセント、セント、クリストファルス、チヴィス、トルトラ、ジャマイカ、ノヴァ、スコシヤ、及びニューファウンドランド等に派遣されし者十九人其會友の數は五

## 勞働、旅行

千三百五十人(ノヴァ、スコシヤ及びニューファウンドランドに於て八百人西印度諸島に於て四千五百五十人)に上れり又一千七百八十年に於ける米國の巡回は廿巡回傳道者は四十二人、會友は八千五百〇四人ありしが一千七百九十年に於ては一百十四の巡回、二百廿八人の巡回傳道者及び五万七千六百卅一人の會友あるに至れり一千七百八十年に至る迄メソヂスト教派の成功は實に驚くべき堪へたる者なり而るはウエズレーの在世中最後の十年間に於ける傳道の成績は過去四十年間の成績より倍して尙餘あるあり

プリストン年會の終るや否や夫の老練なる傳道者は再び其榮ある傳道旅行の途より次の三週間をウエールスに費し八月二十七日プリストンより還り而して九月二十七日迄當地方にて日々役務に執掌せり八月二十九日(日曜日)朝祈禱を誦し説教をなし且つ補助者あくして主の晚餐を施し滿三時間に亘りしが午后に至り復び屋外に於て説教し翌日ハキヤスルカレー及びデッチャートに於て二回の説教をなせり此週爾餘の時日は之をプリストンに説教とスクデモール夫人の傳記の纂緝に費し九月四日(土曜日)

バスに赴きて説教し翌五日(日曜日)に於て左の如く記せり十時に夥多の會衆來會せしむ斯く受餐者の多きは當地に於て予の嘗て見ざりし處なり……月曜火曜水曜の三日間は毎日一回金曜日には二回の説教をなし九月十二日の日曜日はプリストンに於て費し而して其週中に九百四十四人より成り立つ諸組を會し且つソルンベリー及びキングスウィードに於て説教せり氏の斯の如くして全一ヶ月を此地方に費し九月二十七日(月曜日)ロンドンに向て出發し途中デヴァイセス及びサリスベリーに於て説教し水曜日にウインチェストル及びホルツマウスに於て水曜金曜の兩日にハワイト鵬のニューボルトに於て説教せり十月二日(土曜日)午前二時ホルツマウスを去りロンドンより二十英里なるコブハムに於てゼームス、ローゼルス、ヘストル、アン、ローゼルス及び他の六人の朋友等が馬車を以て氏を迎ふるに會へりローゼルス氏曰く氏は身軀精神共に壯健にして來着せり我儕は皆コブハムに於て共に食事とあし午後六時に至てロンドンに着し共々歡ばしき心を以て主を讚美せりと次日即ち十月三日(日曜日)ウエズレー

一千七百九十年

六百二十一

ウエスレー最  
後の屋外説教

「シテイー、ロード」講義所お於て二回の説教を奉し且つ愛餐を行へり  
 ウエスレー「ロンドン」に留まると僅か二日にして十月五日六十英里餘を  
 隔つる「ライ」に赴き靜肅なる大衆に向て説教し次日再び屋外に於て説教せ  
 り氏が屋外にて説教せしは之を以て終りとす此時説教の題「神の國は近  
 づけり爾曹悔改て福音を信せよ」のキリストの第一屋外説教の題なりし  
 が氏は自ら記して「此時之を聽きし者ハ皆殆んどクリスチャンたらしめら  
 るゝが如き感想を抱きたるが如し」と云ひ此時共に居りし「ロバート、ミナル  
 は其語にハ非常の権能の隨ふありて聽衆の涙雨の如くに下きり」と云へり  
 ウエスレーは同夜再び「ライ」に於て説教し十月十日（日曜日）の役務をなさん  
 お爲に「ロンドン」お歸り次日「ノルフオルク」に向て出發せり同二十日（水曜日）  
 氏は「デイス」に於ける國中屈指の大會堂に於て説教し而して「過る百年間ハ  
 は斯く聽衆の此會堂に充滿したるとなし」と云へり其題は「爾曹遇ふとを得  
 る間ハエホバを索ねよ」の一節なりしが其説教にハ實に驚くべき結果の隨ふ  
 ありき同夜及び翌日は「ベリー、セント、エドモンズ」に於て説教し而して十月

二十二日（金曜日）「ロンドン」に還れり○既に出版しあるウエスレーの日記ハ  
 是より二日後の記事を以て此年を終れり即ち十月二十四日（日曜日）予ハ  
 「スピタルフヒールツ」の會堂に於て夥多の會衆に向て「神の全武具」を講明し  
 午後ハ「ハッシュヤドウエル」のセント、パウルス會堂に於て一層夥多の聽衆に向  
 て「無くて叶ふまじき者は一なり」の緊要なる眞理を説て彼等を奨勵せり予  
 ハ彼等が善き方を撰みたらんことを望む

此年の剩餘は氏が自稱する「小旅行」即ち「ベッドフォールド、ノルシア  
 ン、フロンシール、ヘルトフォールド、シール、ケント」等の短き巡回ハ費せしなる  
 べし

一千七百九十一年 八十八歳

ウエスレーの多事なる生涯は今僅かに二ヶ月を餘せり多年の間ウエス  
 レーは三月一日頃に「ロンドン」を去り北部及び愛爾蘭旅行の長途に就くを  
 例とせしが此年に於ても其身老衰せるにも拘はらず復び同様の事をなさ  
 んど固く決定したり之おつき「ヘンリー、マイル」ハウエスレーが先づ馬車を

プリストルに送り己の朋友等と共にバス行の馬車にて赴むかんと欲し既に其馬車中に坐席を買求め居たることを云へり、然るに氏は此長旅行の途に就かんと定めたる日と殆んど同日に地を去て天の旅路に就けり

ウエズレーの六十五年の間神の榮ある福音の熱心、勤勉、克己、不倦の宣傳者なりしが當時齡大に邁み身体甚だ老衰したるにも拘はらず尙ほ永眠の一週日前迄氏の最愛の役務を執れり、左に氏が公然勞働をせしたる最後の一週の記事を記すべし

二月十七日(木曜日)に當時昌盛なるランベスに於て「爾曹壞る糧の爲に勞かずして永生に至る糧の爲に勞くべし」を題として一場の説教をなし夫よりロンドンに歸りて少しく不快ありしが自ら感冒の氣味ありと云へり翌十八日には平常の如く讀書執筆しオールリング氏の宅にて食事をなし夜に至りチェルシーに於て「王の事至急を要す」の題にて説教せしが其説教中一二回少時中止し且會衆に告て感冒の爲に音聲を害したれば斯く少時中止せざれば語を續くると能はざると云へり氏は例の如く諸組の集會を

ウエズレーの勞働最後の週

感冒の氣味あり

預定せしも遂に自ら之を掌る能はずしてセームス、ローゼルス及びジョセフ、ブラッドフォードをまて代理せしめたり

十九日(土曜日)は専ら讀書執筆に從事し而してウォルセストルのスザンナ、ナツプ夫人に左の書翰を發せり、此書翰は決して冷却するとなき氏が熱心を示す者なり

「拜啓當時小生が健康大に不確にして爲み本年巡回の都合を確定致兼候へ共若し神許し給はば來る二十八日はプリストルに向て出發する心算に御坐候併し何所迄巡回するを得べきや未だ確定致難く候若し健康に異狀なくば三月二十二日には貴地に參る積りに御坐候其節御互に靈肉共無事にして相見るとを得ば寔に滿悦の至に御坐候敬白  
ロンドンにて

一千七百九十一年二月十九日

「セウエズレー」

同日氏はアイスリントン、グリップヒス夫人の宅にて食事をなせしが此時其友の一人自ら請ふて約百記四章より七章迄即ちエリパズの言とヨ

一千七百九十一年

六百二十五

プの答とを朗讀せしが之れ實に此死に近づける老翁の當時に能く適合したりしかり食事の後ウエスレーハヰタイ、ロードに於て自ら悔罪者の集會をなさんと定めしも人々の勸告により遂にブラツクンベリー氏をして已れお代らしめたり

次朝(日曜日)常例の如く四時に起き出でしも全く安息日の役務を執るお堪へき七時又至て再び寢牀に就かざる可らざるに至り夫より三時間の睡眠をなし午後復入寢して再び睡眠し而して侍者をして己が二の説教を朗讀せしめ後階下に下りて夕登を喫せり

二十一日(月曜日)には少しく快氣を覺へしかバ他人の忠告ありしにも拘はらずトウイッケンハム會食の約を實踐して其姪ミス、サラ、ウエスレー及びミス、リツチーと共に其所お赴けり此時氏は途中メーリー、フイツゼラルド貴婦人を訪ふて共に談話し且つ最も懇篤なる祈禱をなして相別れたり  
二十二日(火曜日)平常の如く務を執りアイスリントン<sup>アイスリントン</sup>のホルトン氏宅よて食し而して我儕望む所の者即ち信仰を以て義とせらるゝことを靈に由

て待つなりの一節を題としシタイ、ロード講義所よ於て説教し後組長を會せり

二十三日(水曜日)常例の如く朝四時に起き(次朝も爾<sup>シカ</sup>なせり)ローセルス氏と共にロンドンより十八英里なるレザルヘッド市長の許を訪ひ其食堂にて爾曹遇ふことを得る間にエホバを索めよ近く居給ふ間又彼に呼べの一節を題として一場の説教をなせしが是を氏が最後の説教となす

二十四日(木曜日)は樂しくベルハムなる舊友ウルフ氏の宅お費せしむ此日は殆んど平常の健康お復したるが如く見へたり又氏は此日左の最後の書翰を書きしが之れ夫の奴隸廢止案を議會よ提出したるウイルバルフォールスお寄せたる者にしてウエスレーは實に最初の奴隸廢止論主張者の一人よてありしなり

「謹啓若し全能者が夫のアサチシアスの如く足下を興し給ひたるにわらざれば足下は宗教英國又人類の恥辱たる夫の惡むべき罪惡に反對して足下の榮ある企圖を成就被成候と眞お難かるべく候實に神若し足下

最後の説教

最後の書翰  
(ウイルバル  
フォールスに  
寄せし者)



を特<sup>ニ</sup>此事の爲<sup>ニ</sup>起し給ひたる<sup>ニ</sup>あられざれば足下は人間と惡魔との反對<sup>ニ</sup>由て遂<sup>ニ</sup>疲かれ果て給ふに至るべく候併し神若<sup>ク</sup>足下と偕に在まし給はば誰か足下<sup>ニ</sup>敵し得可申や彼等<sup>ガ</sup>凡ての勢力を聚合致候とも如何で神の力に勝るとは候べき足下善を爲すに倦むと勿れ神の聖名に依り其能力<sup>ニ</sup>頼て勇進し而して夫の最も惡むべき亞米利加奴隸賣買をも全く地を拂ふに至らしむる迄御奮勵有之度候

小生は今朝亞弗利加人の手に成れる雜書を通讀致し彼等黒人が白人より殘虐を受けて尙訴ふる處なき情況を見て大<sup>ニ</sup>憤慨致候是れ白人<sup>ノ</sup>對する黒人の証言<sup>ハ</sup>全く無功なりとの我殖民地<sup>ニ</sup>於ける法律の然らしむる處にして實に言語に絶へたる咄々怪事に御座候

足下が御幼少の時より足下を導き給ひし神此事<sup>ニ</sup>於て又凡ての事に於て絶へず足下を強め給はんとは是れ小生が篤く祈願する處<sup>ニ</sup>御座候

頓首

ロンドンに於て

病漸く重し

一千七百九十一年二月二十四日

ジョン、ウエスレー

二十五日(金曜日)ウエスレー、ウルフ氏と共にシタイー、ロードに歸せり、氏は二階<sup>ニ</sup>上りて半時間人を退けて獨居せり霎時<sup>ニ</sup>して夫の忠實なるジョセフ、ブラッドフォールド其室に到り見しに大に不快の容体なれば直に醫師ホワイトヘッド氏を迎へたり而るに此將<sup>ニ</sup>死せんとする老父は醫師に向ひ徐ろに「彼等(朋友等)は予に就て過度に憂懼せり」と云へり

二十六日(土曜日)は多く睡眠を以て送る

二十七日(日曜日)に至り少しく快氣を覺へ椅子に凭れて滿面笑を含<sup>み</sup>而して其兄弟の讚美歌中より左の一節を歌へり

「最期544のきりまで まもりたまへ、

つゐのかちどきを ぬさせむまへ、

“Till glad I lay this body down,

Thy servant, Lord, attend!

And oh! my life of mercy crown

一千四百九十一年

六百二十九

夫より氏は語氣を強めて「我儕の友ラザロ寝たり」と云ひし其姪ミス、ウエズレー及びミス、リッチー氏と共に祈れり、氏は去る一千七百五十三年に於ける病氣の時を指して「プリストンに於て予が言ひ出でし語は左の如くなりき、我の罪人の首なるもイエス我が爲に死し給へり」と云ひしかばミス、リッチー問ふて「今も尙其語を用ひ給ふや」と云ひしが氏答て「然り實もキリストの万物の上にあり彼は萬物の上に在し給ふなり」と云へり、氏は夫より暫時假寐せまが夢に諸方を巡回して或は説教をなし或は組會を司れり

二十八日(月曜日)に至り氏の疲勞大に増したれば醫師ホワイトヘッド氏の醫師の參診を請はんと云ひしウエズレーは之を止めて「ホワイヘッド氏に誰よりも善く予の身体の情態を知れり予は氏を以て満足す他に醫師を招くを要せず」と云へり此日は多く睡眠の中に費し語を發じざる稀なりしが其醒めたる時低聲にて明瞭に「キリストの血に頼るの外全く至處所に入るの途なし」と云ひ而して「爾曹我儕の主イエス、キリストの恩を知

る彼は富める者なりしを云々の聖書の語を引き辭を強めて「之れ唯一の基礎にして他は基礎あるとあし」と云へり、今朋友等ハ氏が既に終りに近づけるを知りて非常に驚惶し夫の痛歎に堪へざるジョセフ、ブラッドフォールドの如きは傳道者等に急使を發して左の如く彼等の祈禱を乞へり

「兄弟よ、ウエズレー氏甚だ危篤あり、祈禱あれ祈禱あれ祈禱あれ」

一千七百九十一年二月廿七日      ジョセフ、ブラッドフォールド

然るに凡ての事無功に歸しウエズレーの事業の爰に其終りを告げたり三月一日(火曜日)即ち終夜苦痛せし翌日傍らに在る者氏に苦痛あるや否やを問ひし「否」と答へ而して左の讚美歌を歌へり

「天に榮る地に平和、	亡び失せたる人類を
救ひ出さん聖旨もて	ペツレへムなる賤が家よ
生れ給ひて今いはや	至上所よいまそエス君よ
きみが聖民よ歸り來て	めぐみの御國建てたまへ、

きみよふたたびみたまもて そのをしへ子よ天降り  
 終ることなき王国をば れこそせたまへそが衷心に、  
 諸國人を従せ 互にかたみにかもす敵氣  
 除きて世をばながものと なすころさとの外わらね、

“All glory to God in the sky,

And peace upon earth be restored!

O Jesus, exalted on high,

Appear our omnipotent Lord.

Who, meekly in Bethlehem born,

Didst stoop to redeem a lost race,

Once more to Thy people return,

And reign in Thy kingdom of grace.

Oh, wouldst Thou again be made known,

Again in the Spirit descend;

And set up in each of Thy own

A kingdom that never shall end!

Thou only art able to bless,

And make the glad nations obey,

And hid the dire enmity cease,

And bow the whole world to Thy sway.”

斯く信仰博愛の唱歌をなせる際遂に其力を失ひて大に疲勞に陥りしが  
 後「予書せんを欲む」と云ひたれば直に筆を興へ紙を其前より置きたるも手  
 意の如くならず「予能くせず」と云へり是に於て「ミスリツチ」妾卿が爲  
 に書くべし其謂はんと欲する所を告げ給へ」と云ひければ答て「他に何もあ  
 り、只神我儕と偕に在し給ふとの一事のみ」と云へり  
 「予起座すべし」との言を聞て人々氏が衣服を整へる際此愉快なる老翁再  
 び左の如く歌ひ出たなり

「息のつくかかん其間  
我盛失せて地に消え  
生ける此世に後の世に

歌ひ讃へん主の聖名を  
天にたゞへんいと妙へに  
わが贖へこそ絶ぐざらめ、

天地を造つてつくりし  
なやめる人をなぐさめつ  
もろすかたなき大神に

うごかぬまこと世に残し  
まづしき人をやしなひつ  
たよる人こそ幸ならめ、」

「I'll praise my Maker while I've breath ;

And, when my voice is lost in death,

Praise shall employ my nobler powers :

My days of praise shall ne'er be past,

While life, and thought, and being last,

Or immortality endures.

Happy the man whose hopes rely

On Israel's God ; He made the sky,

And earth, and seas, with all their train ;

His truth for ever stands secure,

He saves th' oppressed, He feeds the poor,

And none shall find His promise vain.”

氏再び椅子より弱き聲ひて「主よ爾は語り得る者にも語り得ざる者にも力を與へ給ふ、主よ我儕凡ての心お語り給へ而して我儕をして爾が我儕の舌を解き給ふことを知らしめ給へ」と云ひ而して又左の如く歌ひ出でしが是れ氏が地上に於ける最後の讚美よてありき

「榮きは常に父と子聖靈和合妙なる神にあま」

“To Father, Son, and Holy Ghost,

Who sweetly all agree.”

茲に至て聲止まりしを漸く息を収めて我儕今爲そ事を終れり、我儕皆往

くべし」と云ひ自ら喜ぶ充ち居たりしも既に全く疲勞し果てたり、氏寢牀に復へり暫時穩かに睡りたる後目を開き其周圍に立て悲歎に暮れ居る者に向ひ「祈り且つ讚美せよ」と云ひ彼等が直に之に從て爾爲せし後、ジョセフ、ブラッドフォールドに己が衣裳櫃の鍵及び其中に在る物に就て問ひ而して左の如く云へり「予は予が受托人の爲に萬事を整へ置ざる可らず、予を葬むるには毛布の外何をも用ゆ可らず、予が遺骸は棺に收めたる後之を講義所に運び至るべし、夫より氏の地の事よつき配慮を要する事は是まで終りたるが如く復祈り且つ讚美せよ」と呼べり是に於て人々復び跪て祈禱せしが此將に眼を閉ぢんとするの老父熱心其祈禱特にジョン、ブロードベントが神がウエスレーに由て設置し給ひし教理及び條例の組織を向後尙祝福し給ひんと求めたる祈禱に應言せり、彼等起て此將に逝ふんとする聖徒に近づき而して氏を迎ふる天使の到るを待てり、氏の最も穩かき其處に居たる凡ての人々と握手の禮をなして告別の辭を陳べたり、氏に毫も苦痛憂悶なく其狀は恰も至少の風なく微塵の浮雲なき西天に煌耀たる太陽の徐

臨終の狀

々に没入するが如くありき

氏の何事をか言ひしも人々の只「罪の事」の恩賜の事の如きに非らずとの聖語に基きたる説教、墮落したる人類に對する神の愛を廣く凡ての人々に頒布せよとの事の外之を了解するを得ざりき是に於て氏暫時止まり而して其僅かに有する勢力を悉く聚めて「萬事お勝りて喜ぶべき」ハ神の我儕と偕に在し給ふ事なり」と呼び又暫時止て後感謝お充ちたる勝利の手を舉げ「萬事は勝りて喜ぶべきは神の我儕と偕に在し給ふ事なり」と再呼せり、爰に至るまで再び全く其勢力を失へり、或人氏が乾ける唇を濕らせしむ氏謂て「其を食すも益なし我儕其報果を受けざる可らず敢て此死體を願ふる勿れ」と云へり、ゼームス、ローセルス及びトーマス、ランキン、ウエスレーが臥牀の側らに立ち居りしが氏の眼瞠して之を認識する能はず、是等の人は誰を尋るや」と問へり由てローセルス氏「我儕は足下と共に喜ばんが爲に來れり、足下の今其冠を受けんとて往き給ふなり」と應へければ氏の「之れ主の爲し給へる事おして我儕の目よ奇しとする處なり」と云へり

「萬事お勝りて喜ぶべきは神の我儕と偕に在し給ふ事なり」

巽きに榮とされる氏が兄弟の妻の來訪を聞き深く之に禮謝し親愛の接吻をなして「神其僕等に安息を與へ給ふ」と云へり夫人氏が唇を濕得せしかば氏常々食後に捧げし感謝の祈禱をなして「主よ我儕是等と又凡て爾の給ひし恩恵を謝し奉る、願くは我儕の主イエスキリストに由り限りなく教會と王を祝福し且つ我儕に眞理と平安を與へ給へ」と云ひ暫時止まりて後、雲膏を滴たらせりと呼び暫時の後復、萬軍の主我儕と偕み在りヤコブの神の我儕が避場なり、祈り且つ讚美せよと云へり是より於て皆復び跪ひて祈禱せり、氏は終夜幾十回となく「我讚美すべし我讚美すべし」と言ひしのみにて他を言ふ能はざりき、翌朝即ち三月二日(水曜日)マヨセフ、ブラッドフォールドウエスレーと共に祈りしが此時は十時數分前にしてウエスレーの姪ミス、サラ、ウエスレー氏が受托人の一人なるホルトン氏、醫師ホワイトヘッド氏、書籍會計掛ジョージ、ホギットフヒールド、此家に住し居たるセームス、ローセルスとヘストス、アン、ローゼルス及び其小兒一人、其他教友ロベルト、カール、ブラツクンベリーとニリザベス、リッチーも共々跪づき而して夫のウエス

最後の語

レーが忠實なる友にして氏は旅行の隨行者なるブラッドフォールド乘に代て祈禱せり、ウエスレー最後に「さらば」と別を告げブラッドフォールドが「門よ爾曹の首を上げよ永遠の戸よあがれ榮光の世嗣入り來らん」と云へる間に自ら其兩足を收め毫も呻聲なく又歎息の聲もなく全く穩かおして逝けり、惟れ實よ一千七百九十一年三月二日午前十時なりき

「ジョン、ウエスレーの母言へるとあり曰く、兒等よ我眠らば汝等直に讚美の歌を歌ふべし」と、ウエスレーが死するや否や其朋友等は遺骸を圍繞して左の讚美を歌へり

「汝がたましひを受けなると 遙かに立てるさま見よや  
その功績を示しつゝ 愛のあんむり捧げつゝ

“Waiting to receive thy spirit,

I to! the Saviour stands above;

Shows the purchase of His merit,

Reaches out the crown of love.”

一千七百九十一年

六百三十九

夫より彼等共に跪づき今天に昇りたるエリヤの上衣の其従者等の上に止まらんことを祈せり

ウエスレーの遺骸ハ三月九日シタイ、ロード講義所の後ろに葬りしが其葬式ハ人群の爲に不便あらんことを慮り當日午前五時に式を行ふことなせり、斯く評決せしは葬式前僅かに十二時間以内の事にしてウエスレーの朋友等に之を報せしは實に匆卒の事なりしも尙其來會せしもの數百人の多きに至れり、是等の會葬者には皆ウエスレーが法衣を着け冠と光暈<sup>カ</sup>を戴ける像を巧みに刻み出せるビスケットを配與せり

ウエスレーは身丈少しく中等以下(凡そ五英尺半)にありしも全體寔に均一にして些少の饒肉なく且つ甚だ強壯ありき、其額ハ鮮明にして滑かみ、其眼ハ炯々として人を射り、其愛すべく親しむべき顔良は彼れ末年に至る迄之を保有せり、一般の學識智能に於ては彼に勝る者少く、其新約聖書の智識に至てハ假令英語聖書の語を引用するも窮すとあるも原語即ち希臘

葬式

ジョン、ウエスレー  
容貌

才識

著者として

説教者として

交際家として  
勤勉

語より之を引用するも窮したるとなき程なりき、著述家として彼が体裁の特質は簡單明瞭有力の三として彼は大に多言を忌み常に至少の言を以て述ぶることを勉めたり、講壇に於て彼が容姿ハ雅致平易にして其動作は溫柔にして自然且活氣あり、而して其音聲ハ甚だ高からざるも明瞭にして勇壯ありしなり、交際社會に於ては彼の高尚なる一個の紳士にして而も最も自由又貴賤貧富の人々と交際をなせり、又彼が勤勉に至ては殆んど絶世なりと云ふの外なし、彼が五十年間巡回傳道旅行里程は二十五万英里おして其説教の數は四万以上ありと云へり、彼は雲雀と共に起き太陽と共に旅行し而して其愛唱せし「世界の我教區なり」との自言に従ひ遍く三王國中に傳道せり、彼の旅行を見る時は我儕其何如にして筆を執るの時日を有せしかを奇しまざるを得ざるが其著書を見る時ハ彼が何如にして傳道するの時を得しかを異しまざるを得ざるなり、彼の手は常に業務に充ち居りしも其動作は決して混乱するとなく、而して其活動止むなきの勞働中尙夫れ惑星の餘々ハ其軌道を運行するが如く整然として毫も擾亂する處なかりき、實に寸

時までも之を無用の事と費そは彼が負ふたる大任の決して許さざる處なりしなり

獨立獨歩の偉丈夫

今筆を擱くも當り爰にウエスレーの全豹を概言すれば 彼は獨立獨歩の偉丈夫にして彼が前に彼が若き者なく彼が後に彼が若き者なく又彼が時代も彼も並ぶ者なかりしあり、彼が体格、敏才、奇智、明察、辨決、記憶、慈善、敬虔、勤勉、談話、懇懇、舉動、衣服等は彼をして地上に於て最も完全なる者たらしめたり、實に一人にして彼が如く完備したる者は天下の甚だ稀に見る處なり、博士ドツピン曰く「ホイマール又はミルトンより大なる詩人、カルヴィンより大なる神學者、ベーコンより大なる哲學者、古今の最も著名なる戯曲者より大なる戯曲者は或は起るとあるべしと雖どもジョン、ウエスレーより著るしき教會のリヴァイヴアリストは決して起らざるべし」と又ロールド、マコレーは曰く「彼が能辯と其論理的の鋭敏とは彼をして文學社會に嶄然頭角を現はさしめたるべく而して其政治上の才能は決してリチエリコの下に出でざりしも彼は世の誹毀讒謗を度外にして其凡ての能力を人類

博士ドツピンの評

ロールド、マコレーの評

の爲に最大善事と誠實に自任したるとも注射せりと

彼の名聲の赫々たる敢て一英國に於ても米國に於てもウエストミンスターに於てもワシントンに於ても一其爲ふ碑文を贅するを要せず只

ジョン、ウエスレー之墓

一千七百〇三年生  
一千七百九十一年没

を以て足れりとす

ジョン、ウエスレー之傳大尾

一千七百九十一年



...ys :  
... was not a *designing* man ; cunning he had none : he  
... a man of one idea : his sole aim was to save souls. This was the  
*philosophy* of his life. All his actions had reference to this. He had no  
preconceived plans, and hence it is needless to speculate about his mo-  
tives. The man is best known by what he *did*, not by what phi-  
losophers may suspect he *thought*."

In this condensation the constant aim has been to give a con-  
nected history of the life and work of this truly great man, to show  
what he did, and where and how he accomplished such wonderful re-  
sults for Christ and humanity.

Lengthy discussions, especially the Calvinian controversy that  
engaged the attention of religious men and led them into such excited dis-  
cussions during the greater part of the last century, but with which  
Wesley had very little to do, have been given only a passing notice.  
Many interesting but unimportant letters have been omitted, also the  
annual summary of Wesley's literary work.

In presenting this volume it is with the hope and prayer that  
its readers may catch somewhat of the spirit that animated Wesley  
and consecrate their lives to the service of his Master.

Charles Bishop.

Tokyo. March, 1893.

TOKYO ANGLO-JAPANESE COLLEGE  
INDUSTRIAL PRESS.  
AOYAMA, TOKYO.

LIFE  
OF  
JOHN WESLEY

ABRIDGED FROM  
"LIFE AND TIMES OF JOHN WESLEY"  
BY  
REV. L. TYERMAN.

TRANSLATED  
BY  
REV. T. SADAKATA  
AND  
REV. CHARLES BISHOP.

TOKYO, JAPAN.  
THE METHODIST PUBLISHING HOUSE.  
1893.

全 明治廿六年五月  
年 全月 日 日  
日 印刷

版權登錄

所 版  
有 權

編纂者

發行兼印刷者

發行所

印刷所

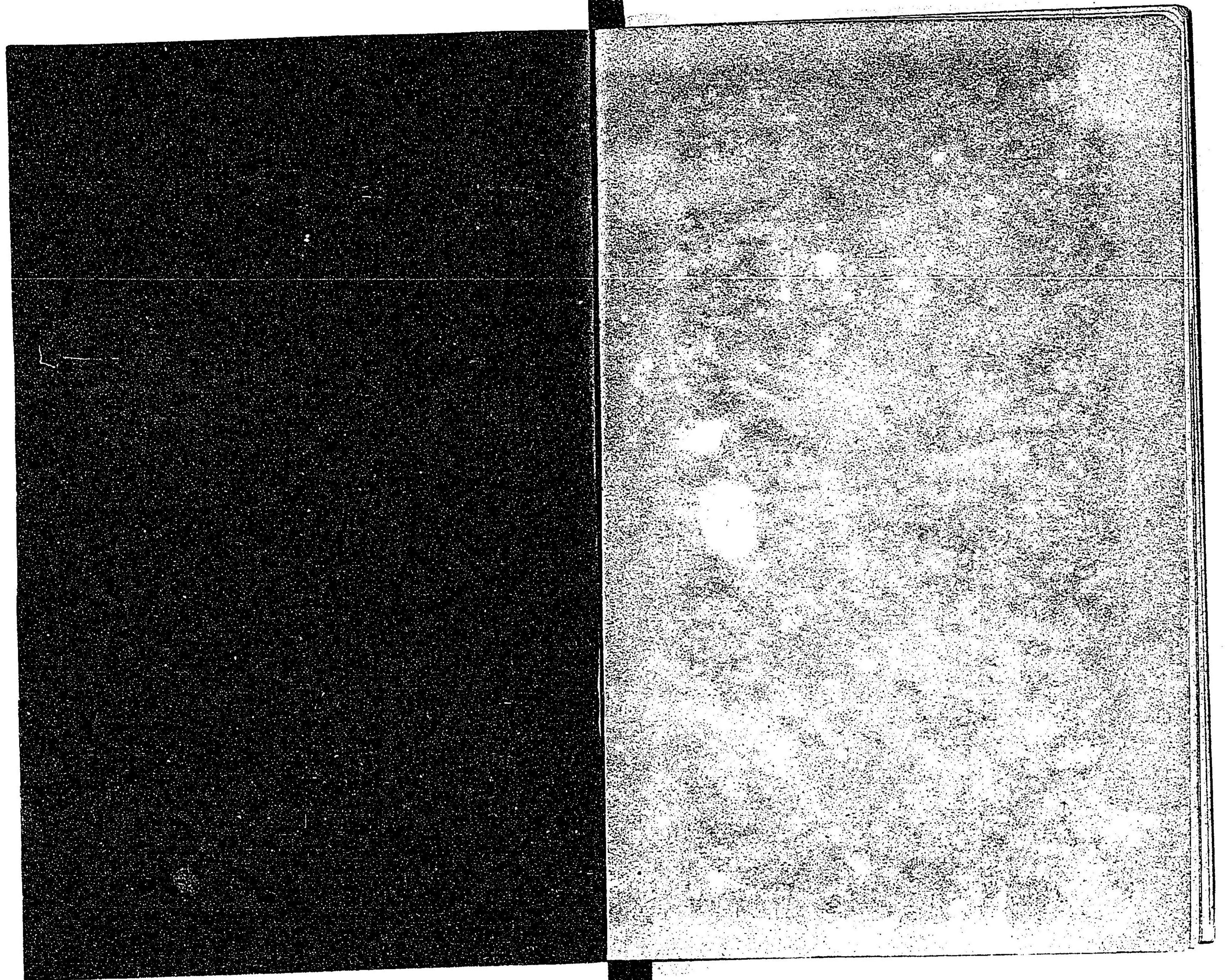
定價全壹圓

チャールス、ビシヨフ  
東京築地明石町十五番地

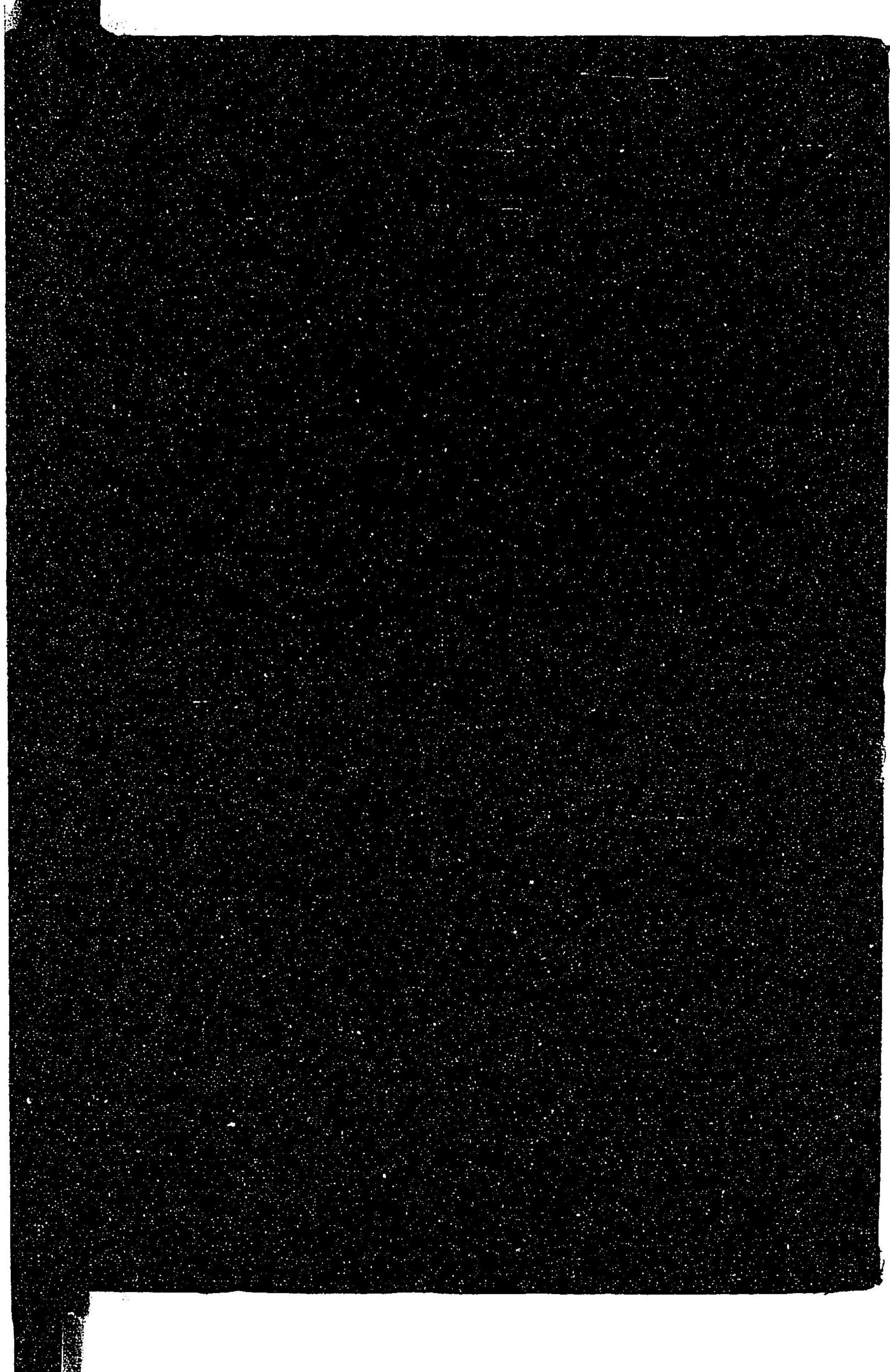
本 多 庸 一  
東京赤坂區青山南町  
六丁目五十八番地

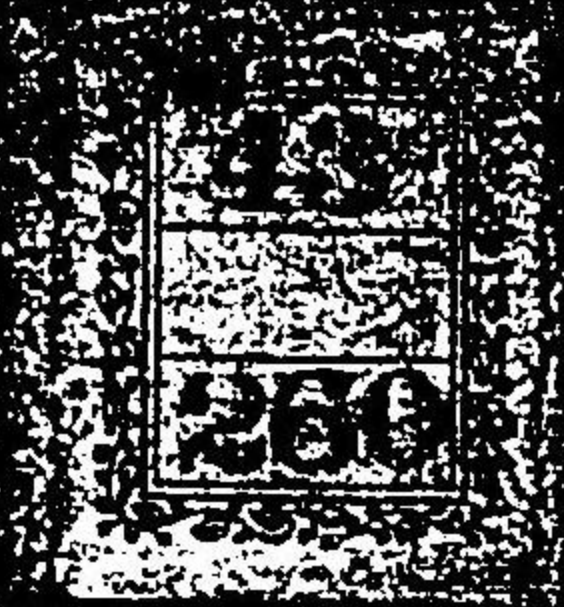
メソヂスト出版舍  
東京々橋區銀座三丁目  
八番地

東京英和學校實業部  
東京府南豊島郡澁谷村  
一番地



43  
260





020768-000-0

43-260

ジョン・ウェスレー之伝

エル・タイルマン/著

M26

ABI-0593

